敦煌本 P.2901 について

張　娜麗

はじめに

唐代初期に成立したと見られる佛經音義書である玄應の『一切經音義』（以下本稿では『玄應音義』と稱す）は、時の推移の中で佛藏や儒藏に收録を重ねられ、中古から中世、近世を經て、現代にまで傳えられている。この書は、佛典を讀修する基本書として利用されたことが、歷代の經藏目録などからも確認されることである。

また、この『玄應音義』は、京師長安から遠く離れた邊境地域である敦煌・吐魯番においても頻繁に書寫された形跡があり、その生の資料が各國に收藏される同地發見の文書資料中から檢出され續けている。これらの資料は、斷裂品が多く、その相貌も千差萬別となっている。そしてその殆どには現存の『玄應音義』と相等しい原句文が忠實に書寫されている。しかし、これとは別に、現存の『玄應音義』とは鈔寫内容に差異をもつものも檢出される。本論で扱う敦煌本 P.2901（以下本稿では「P.2901」と稱す）は、こうしたものの一本である。

P.2901 は、通常の佛經音義とは姿を異にしたところがあり、その特異性が特段に注目され、報告、論考などが數多く出されている（後述）。しかしながら、この寫本は、出土以降、長期間にわたり、單なる音義書の斷簡と見られて、『玄應音義』そのものであることに氣付くことなく、主として韻書研究の對象としてのみ扱われて來ていた。

そうした中、1990 年代後半より、この寫本についての論考が活發化し、ようやく『玄應音義』寫本としての内容が顧慮されるようになったが、しかし近年には、この寫本について、『玄應音義』の鈔寫遺品であることを疑問視する聲が上げられ出すなどしている。

本小文では、P.2901 と『玄應音義』とのかかわり、とりわけ、P.2901 の節略本としての性格を究明しながら、鈔寫遺文の原態を正確に把握し、節略や編卷に關する諸問題について論究を試み、若干の卑見を呈することとしたい。また、稿末に P.2901 について、原文の採録を試み、さらに『高麗大藏經』本（以下本稿では『高麗藏本』と稱す）をもって行本文の校異を記しておくこととしたい。

一、敦煌本 P.2901 研究小史

ペリオの得るところとなった敦煌出土の P.2901 は、のち彼の手を經てパリ國民圖書館に收藏されることとなった。昭和十年（1935）當時、神田喜一郎氏はパリの同館に趨き、直かに敦煌出土の諸文獻を調査、閲讀した後、日本でこの P.2901 も含む多數の眞跡を收録して、『敦煌祕籍留眞』として刊行した〔注1〕。この書には「敦煌祕籍留眞目録」が編述されているが、その卷下・五六に P.2901 の一部が寫眞で掲出され、

「一切經音義　伯目二九〇一　一葉」

と注記されている。神田氏は、P.2901 の具體的内容についての記述は留めなかったが、同氏がこの寫本殘卷を『一切經音義』斷簡と初めて確認したことは特筆に値する。というのは、民國三十年（1941）に、敦煌文獻研究家の姜亮夫氏が同館で同文書を閲讀しているが、博覧の同氏も、當寫本については、「不知爲何經音義」と、その内容をすぐさま見極めることができなかったほどであったからである〔注2〕。しかし、姜氏は、この P.2901 に高い關心を寄せ、その一部（單字 133、雙字 8、計 141 條）を丹念に録寫して、他の韻書を含めて『瀛涯敦煌韻輯』を編み、これを學界に基礎的な音韻研究資料として提供したことは周知される通りである。

こののち、1972 年に潘重規氏が、姜氏の不備を補正、增補し、他の韻書資料と共に『瀛涯敦煌韻輯新編』を刊行した〔注3〕。その二十年余後にあたる 1990 年代末、竺家寧、葉鍵得兩氏によるこの文書の音韻、反切等の分析的研究が公にされている〔注4〕。P.2901 の語音面における研究は、一段と進陟して來たのである。しかしながら、P.2901 の研究は、この段階に至っても、重要な音義書であると理解されるのみで、神田氏が夙に指摘した『玄應音義』とのかかわりについての認識はもたれぬままであった。この間、日本では小林芳規、上田正、石塚晴通の諸氏もそれぞれ當寫本について言及を行っている〔注5〕。

ところで、1990 年代ば過ぎ頃、張金泉氏らが、P.2901 について、圖版を掲載し、解題を付して、さらに詳細な校異を示し、『敦煌音義匯考』を刊行するに至った〔注6〕。この書は、他の敦煌音義資料も含め、P.2901 についての、いわば先驅的詳究を果たした勞作であり、中國古代の語辭、音義研究、殊に佛典の音義書である『玄應音義』の新研究においては、この書がその基礎を担うものとなった。しかし、惜しむらくは用いられた圖版や手寫體文字の印刷の不鮮明さが、P.2901 に限った事ではあるが、問題の多い校勘本（『叢書集成初編』本、及び『慧琳音義』所引本）との比覈の進陟を妨げるかのようになってしまったことである。

この後、十數年を經た 2008 年、張涌泉氏が『敦煌經部文獻合集』で、この P.2901 について改めてより鮮明な録文を起こし、上記の『敦煌音義匯考』が未使用の『磧

砂藏』本や『金藏』（廣勝寺本）を對校諸本に加え、精緻な校勘を行っている。同氏のこの寫本に對する校勘の勞は察するに余りある。しかし、刊行の方針もあってか、寫本の原姿の提示がなく、對校の諸本に關しても、研究上に雜揉さを招き寄せさせかねない『叢書集成初編』本や『慧琳音義』所引本を並列的に對校本中へ付加してしまっている〔注7〕。

さて、このP.2901についての本格的な研究は、張金泉氏の「P.2901佛經音義寫卷考」を嚆矢としている〔注8〕。張氏は、先に出された『敦煌音義匯考』の實績をもとに、P.2901をもって現存の複數の音義書と比覈した結果、「它與玄應《一切經音義》關係密接」（原文は簡体字。以下簡体字表記は舊字に改めて記す）と述べ、P.2901と『玄應音義』とのかかわりについて一歩踏み込んだ見解を示すことになった。張氏のP.2901に關する研究は多岐にわたるが、ここでその概要を摘記すれば、次の如くである。

- P.2901と今本『玄應音義』（『叢書集成初編』本）との比較。兩者の卷次、經本數、卷數、語辭數に關する詳細なデータを掲出。
- P.2901と今本との卷次の異同について推考。P.2901の卷次の異同は大乘經、大乘論、小乘單經別に配置された結果だとする。
- P.2901の第43～44行に見られる「線」「劒刎」など以下六條の語詞の考察。これらは今本になく〔注9〕、『高麗藏本』をはじめとする諸本に存在することについて注意し、『高麗藏本』の祖本とP.2901が一定の關係を持つと推論。

こうした張氏の研究に續き、近年新たに李圭甲、明惠晶兩氏の論考が出された。兩氏は、P.2901の對校本としてこれまで諸氏の使用していた「再雕本高麗藏」が、近年發見された「初雕本高麗藏」より250年も晩いものであると論じて、論中で大部の紙面を割いて、「初雕本高麗藏」所收の『玄應音義』とP.2901の用字の詳細な對比を行ったのである〔注10〕。

以上、P.2901の音韻、校勘等における研究は、時を遂って着實に深化されて來ている。しかしながら、曾て張金泉氏が提起した諸問題、殊にP.2901と『玄應音義』の關係や卷次の不規則狀況の由來の考究などは、未だ論究が進まぬままとなっていることである。

二、敦煌本 P.2901 書誌學的考察

ここで改めてP.2901の書誌學實態を用紙、形態、寸法、書式、内容概況の各面から把握してみることとしよう。

〔寫本の形態〕

原來は卷子本と見られる。現在その首尾を欠き、殘卷となっているが、發見、轉藏以後、破損のある首尾の紙面に薄紙を貼付して補修、改裝していることが觀察される。

〔寫本の寸法〕

天地幅 29.2 糎、左右長 42.8 糎の楮紙の用紙を 6 枚張り継ぎ、総長 250.5 糎の長巻としている。用紙一紙の寸法からすれば、巻首部の第一紙は、劈頭の約 6 糎が欠失し、巻末部の第六紙は上部で約 1 糎の欠失があったものと見られる。第一紙の前接紙、及び第六紙の後接紙が元來存在していたか否かはこの殘巻からは判別困難であるが、その鈔寫内容から見れば第一紙の前接部には一紙程度（書題と鈔寫對象書籍本文の冒頭部が書寫されていた可能性もあろう）、第六紙の後接部には鈔寫の半途中斷がなかったとするならば、數紙程度（鈔寫對象書籍の後末部の相當數の語句が書寫されていた可能性もあるかも知れない）存在していたもののようにも推測される。

〔寫本の書式〕

紙表と見られる部位は天地各々約 2 ～ 2.5 糎幅の余白を置き、冠、脚を淡墨の横線で区画している。この界部の中に各行の罫線を引いている。各行は天地約 2.3 糎、行間約 2.2 糎とされているが、この行内に謹嚴な楷書で漢語、字音にかかわる文字が鈔寫されている。それらの文字は行幅大の大字單行の掲出語とこれに續く小字雙行の割注式の音義解説となっている。各掲出語は平出させず、その小字の音義と共に連續させて鈔録されている。書寫の字態と嚴正な書式を考慮すれば、これを貫くこの音義鈔書が頭初の表面であったと考えられる。

紙背（左右を翻轉させ背面を利用した）と見られる部位は、紙面に界郭線を施さず天部に最大約 1.5 糎（最小約 0.4 糎）地部に最大約 0.9 糎の余白を殘しつつ、ほぼ天地一杯に行書體を交えた楷書で禪にかかわる問答、及び佛書鈔文、禪法を説く文が單行で記されている。

〔寫本の書寫年代〕

當寫本の書寫年代については、これまでに多くの先學が P.2901 の欠筆や避諱字を徴しそれぞれ推論を出している。こうした避諱字による書寫年代の推定と共に書式等によりその年代を推測する研究も出されており、それらには石塚晴通氏、池田證壽氏の「P.2901（八世紀中葉寫、E 形式）」との推論やこれを承けた張涌泉氏の「石塚晴通等推斷本卷爲八世紀中期寫本、庶幾近是」との見解、また石塚氏から情報を得ていたと見られる小林芳規氏の「九世紀頃」との説があるが、何れも明確な年代を確定し得ずにいることである〔注 11〕。

この P.2901 の鈔寫年代の推定には、紙背の文書の鈔寫内容がこれを探る極めて有効な緒口を提供するようである。紙表の鈔寫と紙背のそれとにどれほどの時間差があるかは不明としか言いようがないが、雙方の書風、字様、書式等からして懸却する書写年代は考慮できず、かなり近接した時にこれらが順次書写されたものと想像され、しかも紙背の習禪者の鈔寫と見られるものが、教化、唱導的目的をもって、演劇的場の設定のもとに創作されたと見られる詩の贈答、應酬を摘記し、『金剛三

昧經』の無生、不生、如來藏、如來禪、頓門を強調する問答の鈔寫を行い、しかも禪の實修法を詳說する文章を写し綴っていることなどから、菩提達摩系の禪の南北に分化して教線を拡大して各々禪匠を輩出する時代、すなわち大滿弘忍の門嗣大通神秀や大鑑慧能、及びその門流が活躍する七世紀終末から八世紀初頭に禪要を學ぶ僧徒によってこの書寫が行われていたように想像されるのである〔注12〕。

〔寫本の内容概況〕

當寫本は、紙表（P.2901）には、一書者の手になる佛經音義（総112行）、紙背（P.2901v）には、冒頭部を欠いた女子、（顗）禪師の詩歌問答による般若の闡明（7行）、及び『金剛三昧經』中の无生法門、无生行、如來藏、如來禪等に關する佛と大力菩薩、舍利弗等との問答（76行）、さらに臥（臥輪）禪師の「入切囓鏃門」と題した無念無佛眞成三昧に至る頓門の行法（20行）が鈔録されている。紙背鈔書末尾の「入切囓鏃門」第8行から書字が小字となり線質の違いと字間のさまにここから後が異筆とされることが多いが、第10行までは前部と同筆と見られる筆態が認められる。第11行以降もその前接部の小字の筆態と近似するところがあるように見える。なお、この書寫の後方空白部を28糎程隔て「孝經一卷并序」の題記が記されている。この文字は冒頭の書と同筆と見られる。「孝經」序、本文の文字はその題記後にも痕跡すら遺されていないため、頭初より鈔寫されてはいなかったもののようである。

さて、紙表は全六紙のうち、一紙ごとに19～20行を綴り、総計112行にわたる文字が遺されている。その書寫形式は、既述した通りで各行の大字で書かれた掲出語のもとに小字雙行の字音を主とした解說が記されている。1行中の掲出語數は3語、乃至4語である。冒頭の第一紙は前述したように約6糎ほどの欠失があるようで4行分程度の文字があったと見られる。第一紙冒頭に書題が記されていたとすれば、概ね8～9語の音義が記されていたことになろう。

ところで、第一紙の冒頭部に遺存している文字をたよりにこの文字の出據を搜索すると、この文字が『玄應音義』（現存の寫本と『高麗藏本』による）卷第一の劈頭に置かれる『大方廣佛華嚴經』卷五の「翳目」の音義注文中に確認されることである。從ってこの第一紙の欠失部分には『大方廣佛華嚴經』の卷一から卷四にかけての部位から抽出して解說した玄應の音義の一部が摘記されていた可能性が高く、この第一紙に前接する用紙があっても一紙程度と想像される。P.2901の題記（經名）や題簽、また卷次等の明記を欠くものの、殘存文字から見て、『玄應音義』の節略鈔本であることは明らかである。

さて、P.2901は下記する通り、前後には書寫對象の原書の卷次に從った鈔寫と共に、中間部にはその卷次に從わず、並べ変えた卷次に沿って、その中より語句を抽出して摘録するさまが見られる。P.2901はかなり恣意的な粗略な鈔本と評されかねない面があるが、現存寫本の第58行から第112行に及ぶ欄外の上冠の余白部分に

注文書寫の誤記を補訂した添書が間隔を置いて少數留められている。それらは「鬻、茜、屍、木、罄、劈」の文字であり、これらを見るとその書寫がかなり嚴密に行われていたことがわかる。これらからすれば、當寫本は志向、企圖をもって原書を簡略化して鈔寫したもの、或いは、そうして撰寫されたものをさらにこの筆者が忠實に鈔寫したものと見ることができるかも知れない。

ここでP.2901の表紙の特長を更に把握するため、その鈔寫内容について、原據の『玄應音義』と比較してみることにしよう。

當寫本は、『玄應音義』全二十五卷を逐次、卷、項を追って鈔寫したものではなく、卷次そのものも順を異にしたところがある。この差異の相のもとには鈔寫者(或いは、節略を行ったもの)の意圖を推察する緒口が藏されるように思われる。因みに、P.2901に鈔寫されたものを現存の『玄應音義』の卷次と照合すれば、

卷一、卷三、卷二十一、卷四、卷五、卷七、卷十、卷十七、卷二十五、
卷二十四、卷十八、卷十九、卷二十、卷十一、卷十二、卷十三、卷十四

とが存在していることが確認される。そこでこれらを現存本で確認される卷次で並べ替えると、その欠けるところは原卷の「卷二、卷六、卷八、卷九、卷十五、卷十六、卷二十二、卷二十三」の計八卷となることがわかる[注13]。ここで、さらにP.2901に鈔寫採録された掲出語の『玄應音義』の各卷における分布狀況を一覽表で示しておくことにしよう。

・　卷次、經名は共に『玄應音義』(「高麗藏本」)による。
・　掲出語欄の括弧内の漢數字はその所在卷を示し、／は卷次の異なりを示す。
・　網掛け行中の數字は各々經種數、卷次數、語辭數を示す。
・　PはP.2901、玄は『玄應音義』の略。

	『玄應音義』所録の經名	P.2901鈔寫の掲出語
第一卷	『大方廣佛華嚴經』	翳□(五)／甕瓚、裘毳(六)／□半(八)／珎饌(十四)／眩惑(三三)／斷齧(三四)／闖、宣(五一)／瓢裂、軛(五八)
	『大方等大集經』	瓌異、禦(十二)／跛蹇、怡懌、監領、輦轄(十五)／焦悸(十六)
	『大集日藏分經』	炒粳、慎儆、嘲(八)／蜎飛(九)／燂、嗽、刀砧(十)
	『大集月藏分經』	矛矟、仏仍(二)／塵曀(三)／陂濼(六)
	『大威德陀羅尼經』	毛毦(十一)／呵食(十四)／鐵柴、窠(十六)／垂胡(十七)／斤斲、輅襲(十九)
	『法炬陀羅尼經』	鑪鍋(二)／停壂(三)／羈縶、坑穽(四)／掩襲(六)／嘶(九)／貪惏(十)
	經種：P 6／玄6	卷數：P 28／玄99　　掲出語數：P 43／玄138
第三卷	『摩訶般若波羅蜜經』	胃脛、淚洟(八)／滋味(二十)／有翅(二四)／適(十三)／凌傷(二五)／恐懼(二六)／匳底(三五)／苜蓿(三九)
	『放光般若經』	我曹(一)／痱瘤、梗澀(十五)／雜糅(二一)／謙恪(三十)
	『光讚般若經』	垓劫、履襪(一)／蜚(二)／恢(五)／須彌天、癘天(二)
	『道行般若經』	詭(六)
	『明度無極經』	昆弟(一)
	『勝天王般若經』	尼坵、三慝(一)／猜焉(經後序)
	經種：P 6／玄10	卷數：P 19／玄69　　掲出語：P 25／玄137

第二一巻	『大菩薩藏經』	被弶(一)／敧觸(八)／栽梓(九)／蜆虫、綺繪(十)／口噤(十一)／資稽、芳羞、仇疋(十三)／訥、闌闇(十七)／饕餮(十八)
	『大乘十輪經』	孳鬣(四)／營耨(六)／舌忤、懇切(七)
	經種：P 2／玄13	卷數：P 11／玄25　　掲出語：P 16／玄91
第四巻	『菩薩見寶三昧經』	寶磺、膺、原隰(一)／旒蘇(二)
	『賢劫經』	躓(二)／好拂、都較(十三)
	『華手經』	和詫(一)
	『大灌頂經』	噴灑(一)／荐臻(四)／檐(八)／齔楊(九)／老寁、詵林、如餉、懊懢(十)／瞢憤、營衛(十二)
	『菩薩纓絡經』	鏗然(十二)
	『月燈三昧經』	俟(十)
	『十住斷結經』	棚閣、嬈固(三)／哂然(九)
	『觀佛三昧海經』	踵、杹(一)／侜張、肺腴、蛸虫(二)
	『大方便報恩經』	蹟蹶(三)／虹、刖足、禍酷(五)
	『密迹金剛力士經』	犇馳(五)
	『菩薩処胎經』	儭(一)
	『大方等陀羅尼經』	動他(二)／若儁(三)
	經種：P 12／玄19	卷數：P 23／玄80　　掲出語：P 36／玄152
第五巻	『海龍王經』	妖態(三)
	『觀察諸法行經』	不槩(三)
	『菩薩本行經』	災禍(中巻)／万岐(下巻)
	『稱揚諸佛功德經』	洞清(下巻)
	『等目菩薩所問經』	昺徹(上巻)／晴陰(下巻)
	『中陰經』	線、劒刎(下巻)
	『濡首菩薩無上清淨分衛經』	庶隙(上巻)／慷慨(下巻)
	『迦葉經』	一戝(上巻)
	『發覺淨心經』	籠罩(下巻)
	『如来方便善巧呪經』	風齲
	『勝鬘經』	介炎
	『魔逆經』	陽燧
	『寶網經』	怵惕
	經種：P 9／玄64	卷數：P 11／玄17　　掲出語：P 17／玄35
第七巻	『正法華經』	開闔(四)／韶(七)
	『弘道廣顯三昧經』	力贔(四)
	『等集衆德三昧經』	播殖(中巻)
	經種：P 3／玄49	卷數：P 4／玄14　　掲出語：P 4／玄23
第十巻	『般若燈論』	箭笥(十)
	『大莊嚴經論』	擾袂(一)／掐傷(三)／鄙褻(五)／中哽(十三)
	『攝大乘論』	弥彰(五)／練摩(七)／以楔(十一)
	『十住毗婆沙論』	峻峭(二)／埤助(五)
	『地持論』	悲側(一)／振給(四)
	『縁生論』	舌咤
	經種：P 6／玄18	卷數：P 13／玄42　　掲出語：P 13／玄59
第十七巻	『阿毗曇毗婆沙論』	評曰(一)／操杖、駁色(九)／俾倪(四六)
	『俱舍論』	策(六)／夏方(八)／串脩(十七)／豪氂(二一)
	『出曜論』	羽賓、呻嗽(一)／瘡痍、奸宄、俟、紖(二)／燔燒、冒(三)／剗(五)／不草(七)／企望(八)／甍豆、如笮(十)
	經種：P 3／玄5	卷數：P 15／玄66　　掲出語：P 21／玄107
第二五巻	『阿毘達磨順正理論』	漉、刻齊(三一)／所瀹(三三)／人捻、捶撻(三四)／躭話、誇衒(五四)／狎恧(五九)
	經種：P 1／玄1	卷數：P 5／玄62　　掲出語：P 8／玄61

第二四卷	『阿毗達磨俱舍論』	飢(十)／如篇(十一)／隄、痼(十三)／療病(一四)／典刑(十五)／確陳(二九)
	經種：P 1／玄1	卷數：P 6／玄27　　揭出語：P 7／玄132
第十八卷	『成實論』	抱夘(十七)
	『裨婆沙阿毗曇論』	不晌(一四)
	『解脱道論』	韙(八)
	『雜阿毗曇心論』	軟中、弥離車(一)／爲嫉(二)
	『立世阿毗曇論』	敧庆(二)／吹簫(十)
	『四諦論』	泅水(一)
	『分別功德論』	粹哉(二)／酬酢(三)
	『辟支佛因緣論』	瞷動(上卷)
	經種：P 8／玄16	卷數：P 10／玄76　　揭出語：P 12／玄89
第十九卷	『佛本行集經』	勦勇、剔鈎、駦鹹(十一)／腴葉、齍醬(十二)／筋陡(十三)、忺迕、毤落(二六)、戀嫪(二八)、脂椹(三一)、焼藝(三四)／白氈(三九)／彤然(四〇)／汧水(四二)／蒨草(五三)／牢韌、羸瘠(五六)／香邔(五七)／滑瞽、斫癹(五八)
	經種：P 1／玄2	卷數：P 14／玄52　　揭出語：P 20／玄110
第二十卷	『陀羅尼雜集經』	勇喆(三)／抆之(六)
	『六度集經』	仇憾(四)
	『菩薩本緣集』	軌地、財賄(一)
	經種：P 3／玄28	卷數：P 3／玄21　　揭出語：P 5／玄47
第十一卷	『正法念經』	穨矛、鴳鳥(一)／堙羅(三)／瑒手(十)／稠穊(四七)／晏然(五六)／鳷呴(五七)／侹直(六五)／頻伽(六七)
	『中阿含經』	剬割(四)／祭餟(六)／拳攝(七)／磔(一四)／兩輪(一六)／剞(三五)／地肥、摽牓(三九)／矾矾、荼帝(五〇)
	『增一阿含經』	五刻、盪鉢(二二)／一函(二三)／顫頑(二四)／溺者(二三)／攢箭(二四)／金扉(三三)／如甛、搆牛(三四)／氣劣(四六)／誦習(四七)／驀脩(四八)／綺語(五一)
	經種：P 3／玄4	卷數：P 25／玄89　　揭出語：P 32／玄110
第十二卷	『長阿含經』	并餧、嘆咤、蘸ミ(二)／企望(四)／隊ミ(七)／凍瘃(一九)／穴泉(二一)
	『別譯長阿含經』	歡食(二)／榴炭(三)／湑ミ(四)／毗紐(十一)
	『雜寶藏經』	畐塞、襤褸、銅魁(四)／老瞎(六)
	『普曜經』	椸架(三)／不啑、訛(五)
	『修行道地經』	樝撕、臠ミ、步搖、餬口(五)
	『生經』	鋃鐺、鳴噈(一)／諄邯(二)
	『興起行經』	曰趕(上卷)
	『義足經』	草姦、遍徇、蠡、名戚(上卷)／晻忽、苦櫜、不嫫(下卷)
	『那先比邱經』	連摞(上卷)／屈无(下卷)
	經種：P 9／玄15	卷數：P 21／玄55　　揭出語：P 35／玄161
第十三卷	『般泥洹經』	腆美
	『五百弟子自說本起經』	傅飾、儫施、俱譚
	『胞胎經』	鄲靬
	『大迦葉本經』	開披
	『辯意長者子所問經』	擗口、飣此
	『七女經』	羅轒
	『佛滅度後金棺送葬經』	陵遲
	『摩訶迦葉度貧女經』	米潘
	『沙曷比邱功德經』	陷
	『樹提伽經』	不惛
	『盧至長者經』	物餲
	『燈指因緣經』	喟然、罄竭、捃拾

第十三巻	『諫王經』	闇ミ
	『耶祇經』	擊
	『時非時經』	釘墳
	『未生怨經』	涕泗
	『泥犁經』	虫豸
	『罪業報應教化地獄經』	鞠頰
	『摩登伽經』	麦鬻(下巻)
	『樓炭經』	噭嚾(一)／梟磔(二)
	『大般涅槃經』	開拓(下巻)
	『佛般泥洹經』	胞罠(下巻)
	『梵網六十二見經』	鞬橛
	『阿遮達經』	阿遮
	『玉耶經』	弭伏
	『瑠璃王經』	帯鞠
	『頼吒和羅經』	鞋羅闍吒國、辭訣
	『鸚鵡經』	吟哦
	經種：P 28／玄81	巻數：P 29／玄35　　掲出語：P 35／玄154
第十四巻	『四分律』	草秸(二)／踉劈　、呴出(一四)
	經種：P 1／玄1	巻數：P 2／玄14　　掲出語：P 3／玄33
総計	經種：P 106／玄332	巻數：P 240／玄833　　掲出語：P 332／玄1639

上記の通り、當寫本の編次や摘語などの様子から見れば、節鈔本であることは分明となるが、『玄應音義』巻一所收の『大方廣佛華嚴經』巻五の音義から、同巻二十五所録の『阿毘達磨俱舍論』巻五十九の音義までを幅廣く寫し取ろうとする姿が見られる。この寫本からは、『玄應音義』所録中の 106 種の佛經、332 項の音義とその注文の一部が檢出され得る。しかしながら、經巻や語辭の選別に關しては、かなり偏向する様相が窺える。例えば、『玄應音義』巻一には、『大方廣佛華嚴經』から『法炬陀羅尼經』にかけて６種の佛典音義が留められ、P.2901 にも同數の佛典音義が見られるが、これとは對照的に、『玄應音義』巻七に本來收録されている『正法華經』から『文殊師利現實藏經』にかけて 49 種もの佛典音義のうち、P.2901 には、僅かに『正法華經』『弘道廣顯三昧經』『等集衆德三昧經』の３種の佛典音義のみが採録されている。しかも、『大方廣佛華嚴經』からは 12 の語辭、『正法華經』などからは僅か１、２の語辭を採録するだけなのである。

三、敦煌本 P.2901 巻次の再檢討

P.2901 と『玄應音義』との間には二つの大きな相違點が見られる。その一つは、P.2901 は『玄應音義』の掲出字とその注釋語を大幅に取捨することであり、また他の一つは、巻次の不規則狀況を見せるといった點である。この巻次の相違について

は、舊來の諸先學は論評を行わなかったが、近年、張金泉氏がこの狀況について注意を払い、二度の言及を行っている。因みに、ここで同氏の文言を引いておくこととしよう。

「粗看凌亂，實則將卷二一移居卷三與卷四之間和將卷一七至卷二十連片移居卷一〇和卷一一之間二端而已，其原因不詳。……」

ついで、これに續く後出の論中で同氏は、

「按玄應書的卷目標明，卷二十一爲“大乘經”，卷十爲“大乘論”，可以推知寫卷以大乘經、論居前。而卷十一標明是“小乘單經”，可以推知卷十一、十二、十三因“小乘單經”居後。」

と記している〔注14〕。しかし、この卷次の不規則狀態の根本原因の解明は行ってはいないのである。

〔P.2901 の未確認諸卷の問題〕

ここで改めて、その卷次の相違を出來させた原因について、すなわち、當寫本の筆者、或いはこうした形を創出した書者の意圖〔注15〕について、推考を試みておくことにしたい。

さて、上記の文の如く、張金泉氏は、大乘の經論と共に大乘の單經を卷次区分の基準に見て、推論を出しているが、しかし、『玄應音義』全二十五卷中、「大乘經」、「大乘論」にかかわるものはほかにも存在している。卷二の『大般涅槃經』と卷六の『妙法蓮華經』は共に「大乘經」であり、卷二十二の『瑜伽師地論』、及び卷二十三の『顯揚聖教論』等、何れも「大乘論」である。しかも、P.2901 で確認される「大乘經」である卷一と卷三の間、及び卷五と卷七の間に、それぞれ同じ「大乘經」である卷二、卷六を置くのが本來の『玄應音義』の姿である。にもかかわらず、何故それらは置かれるべき個所から抜け落ちてしまったのであろうか。單に破損により欠失してしまったとは思われぬところがある。

また、卷十は「大乘論」であるゆえに「居前」させられる、といった張氏の見解が成立するならば、同様の「大乘論」を收める卷二十二、卷二十三は當然それに後續させられることになろう。ところが、P.2901 では、卷十に後續させられているのは、「小乘論」を收める卷十七となっている。これらの事柄については、張氏は詳言を控えるかの感があるが、ここで、筆者の氣付いた事柄について記すことにしたい。

先ず、現在確認できる P.2901 の『玄應音義』に該當する卷數を再掲しておく。

卷一、卷三、卷二十一、卷四、卷五、卷七、卷十、卷十七、卷二十五、
卷二十四、卷十八、卷十九、卷二十、卷十一、卷十二、卷十三、卷十四

これらの配卷狀況を觀察すれば、卷一を卷首に、卷二が省かれて、卷三へと續き、ついで卷二十一を置き、さらに卷四、卷五等と連ねていくさまがわかる。このさま

は総體として鈔寫對象である『玄應音義』の卷次とは異なった不規則な卷の配置となっている。また、P.2901 の卷頭部については、一部欠損がある事實が知られるものの、『玄應音義』卷一の『大方廣佛華嚴經』音義の全内容、及び P.2901 の節鈔本としての要素を考慮すれば、この欠損部位は既述したように、同卷冒頭にと記されている語句、音義の中の數條目に過ぎないと推測できる。

また、末尾の卷十一から卷十四にかけての四卷は、現在の情況から見れば、全體の後部に回される形となっている。卷末の卷十四より以降は原本に破損があるため、後續するものは何卷で、如何なる佛典の音義であったのかは不明であるが、現存の卷十一から卷末までの狀況を觀察すれば、

卷十一：小乘單本
卷十二：小乘經
卷十三：小乘經
卷十四：小乘律

と言った構成となっており、現在 P.2901 に確認されない卷十五、卷十六の兩卷は共に「小乘律」であるため、卷十四の「小乘律」音義に續くものと見られる。P.2901 の原狀から推考すれば、この十五、十六卷は元來、後接されていたものの、破損等によって欠失してしまったのであろう。

ところで、上記の卷十五、卷十六以外に、現在鈔本中に確認できない部分がある。卷二、卷六、卷八、卷九、卷二十二、卷二十三の六卷である。この六卷は、元來存在したものの、寫本の破損等によって失われたものなのであろうか。ここで先ず、『玄應音義』にもとづき、この六卷の内容、卷數について確認してみると、次のようになる。

卷二	『大般涅槃經』	(四十卷)
卷六	『妙法蓮華經』	(八卷)
卷八	『維摩詰所説經』	(ほか 七十一種大乘經律)
卷九	『大智度論』	(一百卷)
卷二十二	『瑜伽師地論』	(一百卷)
卷二十三	『顯揚聖教論』	(ほか 十種大乘論)

これら六卷の音義にかかわる佛典のうち、卷二、卷六、卷九、卷二十二の四卷は、何れも單經であり、卷二、卷六は「大乘單經」で、卷九、卷二十二は「大乘論」である。しかも『玄應音義』の卷中では、卷二は四十卷本『大般涅槃經』の音義であるが、卷九、卷二十二は何れも一百卷を超える佛典の雄編にかかわる音義である。また、卷八は單經ではないものの、『玄應音義』の中では、71 種の佛典の音義を記す「大乘經（律）」である[注16]。さらに卷二十三は『顯揚聖教論』（二十卷）ほか 10 種を收録する「大乘論」の音義を記すものである。これらは何れも長卷の佛經論の

音義を留める卷なのである。このさまを考慮すれば、このP.2901は、節略的な性格等を濃密にもつものであるうえ、專門的佛語等をより減殺しているところが窺われるため、大型の佛典にかかわるものを當初から取り外しながら書寫されたもののようにも思われるのである。

〔P.2901の配卷問題〕

ここでさらに上記した『玄應音義』の卷次がこの寫本で何故このように変移させられているかについて、卑見を記しておくことにしたい。

この件に關しては、當寫本が大乘、小乘の經・論別に配卷されていると推論した張金泉氏も「其原因不詳」とするのみであるが、當寫本の配卷順を詳覧すると、次のような形となっていることがわかる（ここでは、『玄應音義』の後出の卷を前方の卷間に置いた部位のみ記すことにする）。先ず、一つ目の部位は次の個所であるが、

卷第一（大乘單本）

『大方廣佛華嚴經』『大方等大集經』『大集日藏分經』『大集月藏分經』『大威德陀羅尼經』『法炬陀羅尼經』

卷第三（大乘經）

『摩訶般若波羅蜜經』『放光般若經』『光讚般若經』『道行般若經』『小品般若經』『明度無極經』『長安品經』『勝天王般若經』『仁王般若經』『金剛般若經』

卷第二十一（大乘經）

『大菩薩藏經』『大方等十輪經』『說無垢稱經』『解深密經』『分別緣起經』『能斷金剛般若經』『菩薩戒本』『稱讚淨土經』『佛地經』『勝軍王經』『記法住經』『六門陀羅尼經』『般若心經』

と、大乘單本を先にし、大乘經の續きの卷第三の次に卷第二十一を置いている。これは大乘經、小乘經と配列する中で、内容上の關連からわざわざここに据えたというのが正しく、卷第三の後に卷第二十一を配置した理由は、「般若」、及びそのものにかかわる「陀羅尼」の經文の音義を留めるものとしての流れをもたせ、しかも舊譯を先に置き、（玄奘）新譯を後に置くといった基本に從おうとしたからと推考されることである。次の二つ目の個所は、

卷第十七（小乘論）

『阿毗曇毗婆沙論』『迦旃延阿毗曇論』『舍利弗阿毗曇論』『俱舍論』『出曜論』

卷第二十五（小乘論）

『阿毗達磨順正理論』

卷第二十四（小乘論）

『阿毗達磨俱舍論』

とされている。この卷々はすべて小乘の論部に屬する毘曇部（阿毘曇、阿毘達磨は

Abhidharma の音譯語）のもので、第十七所收の『阿毗曇毗婆沙論』は、北涼浮陀跋摩（Bhadhavarman）譯出の舊譯（玄奘新譯『阿毗曇毗婆沙論』の前出のもの）で、さらに『倶舍論』はその摘録語、音義から尊者世親（Vasubandhu）造の論を陳眞諦（Paramtrtha）が譯出した『阿毗達磨倶舍論』のことである。何れも舊い漢譯經論であることが確認される。これに對し、卷二十五所收の『阿毗達磨順正理論』は、世親造の「倶舍論」を衆賢（Samghabhadra）が批判した論著（「倶舍菴論」と稱したものを改め「順正理論」としたもの）、玄奘三藏が漢譯したものである。そして、卷第二十四所收の『阿毗達磨倶舍論』は大唐新譯と付記されるように、玄奘三藏が大慈恩寺の譯場で永徽二年から五年にかけて新たに譯出した經論で、これらを收める卷々が、舊譯『倶舍論』→ 舊譯『倶舍論』批判論 → 新譯『倶舍論』、と配列されているわけである。P.2901 の配卷順は上述のようで、上前のものに密接にかかわるものを後接させるという企圖のもとに成っていることは明らかであり、こうした形を作り上げた者は佛典に明るい緇衣の僧徒以外には考えられぬようである。

四、敦煌本 P.2901 原據の再確認

上記の通り、P.2901 には、明確な佛經名や卷次等の鈔寫が見られないため、これまでには「佛經音義」とされるのみであった。そのため、この鈔寫殘卷が『玄應音義』にかかわるものであることは長く認知されなかったのである。しかしながら、そののち、研究者諸氏の論考等を經て、ようやく本殘卷が「『玄應音義』節鈔本」とほぼ結論付けられるようになった。

ところが、近年に至り、この寫本の『玄應音義』由來說に疑念を呈する聲が上がり出し、例えば、「初雕本高麗藏」と P.2901 との卷次の相違を理由に、

「因此無法排除“伯 2901”不是《玄應音義》的寫本、而是其它寫本的可能。如果眞是這樣, 它可能是《玄應音義》之前的音義書。（…中略…）它與別的版本相比, 遺漏的內容太多, 這讓它的價値大打折扣」

と評述されることなどが起っている〔注 17〕。P.2901 が『玄應音義』の鈔寫本である否かについては、これまで各種の研究成果があり、それらによって『玄應音義』の鈔本としての性格が明らかにされて來たのであるが、これに疑義を差し挾む意見が出されたわけである。李氏らの所論は述意不明瞭なところがあるが、ここで、P.2901 が如何様なものであるのか、『玄應音義』とのかかわりを視野に入れて鈔寫內容を檢証し、筆者の氣付いた二、三の事柄について記述を試みることにしよう。

さて、上記のように、P.2901 には、『玄應音義』の卷一から卷二十五にかけて、計十七卷（中間に八卷の欠卷もあるが）にわたる音義が存在している。この中に卷二十一、卷二十四、及び卷二十五の三卷の內容も確認される。このことは、神田喜

一郎氏の考証以来、研究者間に周知されるようになった事柄であるが、『玄應音義』全二十五巻のうち、巻二十一から巻二十五までの五巻は、玄奘三藏によって新たに譯出された、いわゆる「新譯」佛典となる『大菩薩藏經』から『阿毘達磨順正理論』まで、計26部の經典に對する佛經音義である〔注18〕。ここで、これらの「新譯」佛典に對する『玄應音義』以外の佛經音義について再確認してみることとしよう。

先ず、李圭甲氏らが述べた『玄應音義』より以前の音義書についてであるが、道宣『大唐内典録』巻五、及び同撰述『續高僧傳』巻第三十「隋東都慧日道場釋智果傳」末に附載される智騫の傳記に據れば、北齊の道慧、隋の智騫がそれぞれ「一切經音」、「眾經音」（何れも佚書）を著わしたことが知られる。しかしながら、P.2901に見られる『大菩薩藏經』『大乘十輪經』（以上『玄應音義』巻二十一にあたる）、『阿毘達磨俱舍論』（同　巻二十四）、『阿毘達磨順正理論』（同　巻二十五）の音義は、上記に述べた通り、これらは何れも玄奘譯經にかかわる音義であるため、北齊の道慧、隋の智騫の音義書とは到底考えられるものではない。それ以降の音義書というと、處士顧齊之撰「新收一切藏經音義序」（『慧琳音義』冒頭　開成五年）に、

「國初有沙門玄應及太原郭處士、竝著音釋……」

という一文が見られ、これによれば、玄應法師とこの郭處士こと郭迻とはほぼ同時代の初唐の人物で、『新定一切經類音』（佚書）を著したことがあったということになる〔注19〕。郭迻にかかわる記述は斷片的なものしか遺存しておらず、その詳細は不明であるが、「處士」とあることから、學僧でもなければ、玄奘の譯場に參列した人物でないと見られる。上記の『大菩薩藏經』『阿毘達磨順正理論』などにかかわる音義を著した記録には、この人物にかかわる記事は一片も見當たらない。

また、『玄應音義』より以降の音義書というと、第一に『慧琳音義』が擧げられる。しかし、P.2901に見られる『大菩薩藏經』『阿毘達磨順正理論』『阿毘達磨俱舍論』の三音義に限ったことではあるが、『慧琳音義』には『大菩薩藏經』音義の收録もなければ、『阿毘達磨順正理論』『阿毘達磨俱舍論』音義に關しては、『玄應音義』の當該箇所を引録しているだけである。

こうした中で、P.2901を再閲すると、この寫本は節略本であるため、『玄應音義』の該當部分のすべてを檢出することができないが、現在確認できる『玄應音義』の巻二十一、巻二十四、及び巻二十五の三巻の内容、すなわち、鈔記される文字の實態からして、そのものは『玄應音義』そのものの一部と確認されることである。そのため、この鈔本は、玄應以前の撰書と見ることも、以後の別人の著作と見ることも不可能となる。

なお、李圭甲氏らがP.2901に對し最後に「遺漏的内容太多, 這讓它的價値大打折扣」と評述した文については、當寫本の「節略本」としての機能や性格などを考慮しているものとは見られず、その公正な價値を低減させかねないようにも看取される。

五、敦煌本 P.2901 語辭の選別小考

上述したように、P.2901 は、『玄應音義』原書の一部の掲出語を取り上げ、その注文も縮約して再構築したものと看做されるものであり、その様相がさまざまな箇所に確認できる。P.2901 の各掲出語及びその音義の注文と『玄應音義』原文の掲出語及びその音義の注文を比較すると、P.2901 では、『玄應音義』の元來の掲出語そのものを取るものと、原掲出語の文字の一部又は一方しか取らないものといった二様態があることがわかる。また、その音義の注文も、ほぼ原文通りにするものと、これを節略したものの二種があることがわかる。習字の易化のためか、P.2901 は『玄應音義』原文を適當に取捨しているように見受けられる。ここで、P.2901 の實態を詳知するため、その特徴的な狀態を示す部位について、『玄應音義』で大多數を占める二文字の掲出語とその注釋語とに對比しつつ擧例してみることにしたい。

〔原掲出語をそのまま襲い、注釋をさまざまな形とするもの〕

下記の諸例は、掲出語そのものは『玄應音義』の原文と同様であるが、注文をさまざまな姿とするものである。（以下、引用した『玄應音義』の用例は『高麗藏本』及び傳世寫本による。なお、表記した文例の上段は P.2901 で、下段はそれに對應する『玄應音義』である。）

①所掲の二文字中の一方の異體字のみを列擧し、反切、出典（依據する典籍）、及びその原文、また釋意を記さないもの。

例：「牢慵」（P.2901 の 72 行目／『玄應音義』卷 19 の『佛本行集經』卷 56）

「牢慵、又作纂」

「牢慵、又作纂同、而振反、字林慵柔也、通俗文物柔曰慵」

②所掲の二文字中の一方の文字について文字の實態、及びその反切を記し、依據する書籍名、或いは釋意を記さないもの。

例：「焦悸」（P.2901 の 8 行目／『玄應音義』卷 1 の『大方等大集經』卷 16）

「焦悸、古文痵同、其季反」

「焦悸、古文痵同、其季反、字林心動也、說文氣不定也」

③所掲の二文字中の一方の文字について文字の實態、及びその反切を記し、また部分的な釋意を施して、書籍の名、或いは語解は一部省略するもの。

例：「爲嫉」（P.2901 の 64 行目／『玄應音義』卷 18 の『雜阿豐曇心論』卷 2）

「爲嫉、古文諫㑹㑹同、自栗反、嫉妬也」

「爲嫉、古文諫㑹㑹同、自栗反、楚辭故興心而嫉妬、王逸曰害賢曰嫉、害色曰妬也」

④所掲の二文字中の一方の文字の反切のみを例出し、その他の文字の反切や依據する書藉名を示さず、所掲語の全體を注解するもの。

例：「攘袂」（P.2901 の 47 行目／『玄應音義』巻 10 の『大莊嚴經論』巻 1）

「攘袂、而羊反、檀袖出臂爲攘袂」

「攘袂、而羊反、攘除也、下弥蔽反、苑云袂褾也衣袖也、謂檀衣出臂爲攘袂也」

⑤所掲の二文字の校異、及び異體字を含めた用字を記し、依據する書名や語解を行い、反切や詳細な注釋を示さないもの。

例：「餬口」（P.2901 の 94 行目／『玄應音義』巻 12 の『修行道地經』巻 5）

「餬口、又作餬同、方言寄食也」

「餬口、又作餬同、戸姑反、方言寄食也、江淮之閒謂寓食爲餬、尒疋餬饘也郭璞曰即糜也饘音之然反」

⑥經文の異體字のみの指摘を行い、依據する書籍名や注解を示さないもの。

例：「晏然」（P.2901 の 78 行目／『玄應音義』巻 11 の『正法念經』巻 56）

「晏然、經文從門作闕非也」

「晏然、烏鴈反、說文天清也、晏亦鮮翠之皃、經文從門作闕非體也」

⑦『玄應音義』原文の掲出語及びその音義の注文とほぼ一致しているもの。

例：「𨻰𨻰」（P.2901 の 28 行目／『玄應音義』巻 21 の『大乘十輪經』巻 4）

「𨻰𨻰、說文作爭𦍒同、仕行反、下女庚反、髮亂也、不茂曰爭𦍒」

「𨻰𨻰、說文作爭𦍒同、仕行反、下女庚反、髮亂也、不茂亦曰𨻰𨻰」

P.2901 には、以上のような形姿があり、総體から見れば、原本『玄應音義』の原文、殊に注文部の語解の依據や用例を示す書籍名や釋文の省略が目立っている。

〔原掲出字の二文字の一方を取り、注釋を施すもの〕

『玄應音義』は漢譯衆經中の重要な難解語の二字句を取り上げ、その音義を注記したものである。しかしながら、P.2901 では、こうした二字句の中の一字のみを採取し音義を記したものも相當數見られる。その數は殘卷の中ではあるが、計 39 個所に上る。ここで『玄應音義』に見られる元來の二字句と共にそれらの各々の字例とその所在の行を下記しておくことにする。

P.2901		玄應音義	P.2901		玄應音義	P.2901		玄應音義
行	例字	例字	行	例字	例字	行	例字	例字
5	闞	門闞	29	膺	膺平	56	罝	於罝
5	宣	宣釵	30	躓	躓礙	56	剗	剗治
6	禦	禦之	32	檐	檐邊	58	漉	漉諸
9	嘲	嘲戲	35	俟	俟用	61	飢	飢饉
9	燂	燂身	36	踵	踵相	61	隄	隄塘

9	嗽	嗽於	36	杹	四杹	61	痼	痼疫
13	窠	從窠	38	虹	白虹	63	黿	濕黿
16	嘶	嘶聲	39	覿	覿身	80	磟	櫨磟
18	適	適生	43	線	擲線	81	刳	刳治
21	蜚	蜎蜚	46	韶	音韶	93	訛	訛言
22	恢	恢大	52	策	乘策	97	蠱	蠱明
23	詭	詭嬲	55	俟	憑俟	104	陷	陷此
27	訥	不訥	56	紖	紖繫	106	擊	擊我

これらの個々の掲出字下には、それぞれに音義の注が施されているが、ここでさらにそれらの中の諸例を擧げて、『玄應音義』原本の施注の字句と比較しながら、P.2901 の注文がどのように記されているかを例示しつつ檢証してみることとしたい。(『玄應音義』原書の例は『高麗藏本』による)。

① P.2901 は、『玄應音義』の注中の反切と書名を取り除いて、その異體字のみを注釋している。

例：「宣」(P.2901 の 5 行目／『玄應音義』卷 1 の『大方廣佛華嚴經』卷 51)

「宣、古文愃同」

「宣釵、古文愃同、雪緣反、尒疋宣遍也、說文釵次第也」

② P.2901 は、注中の反切と書名を取り除いて、その異體字について注釋するがここではさらに字義をも注解する。

例：「閫」(P.2901 の 5 行目／『玄應音義』卷 1 の『大方廣佛華嚴經』卷 51)

「閫、又作梱門限也」

「門閫、又作梱同、苦本反、三蒼梱門限也」

③ P.2901 は、注中の書名のみを取り除き、その異體字、反切、字義にかかわる文明記する。

例：「俟」(P.2901 の 35 行目／『玄應音義』卷 4 の『佛名經』卷 10)

「俟、古文竢㑹妃三形同、事儿反、俟猶侍也」

「俟用、古文竢㑹妃三形同、並事儿反、尒疋俟侍也」

④ P.2901 は、『玄應音義』の注中の書名と字義を取り除いて、その異體字と反切及び簡單な語解を表記する。

例：「踵」(P.2901 の 36 行目／『玄應音義』卷 4 の『觀佛三昧海經』卷 1)

「踵、又作種同之勇反」

「踵相、又作衝同、之勇反、說文相迹也、亦追也、往來之皃也」

⑤ P.2901 は、注中の助字「器名也」の「也」字のみ（脱字の可能性を含む）を取り除き、その他はほぼ原書通りに反切、書名、字義、さらに經文の異字に及ぶ事柄を綴記する。

例：「柧」（P.2901 の 36 行目／『玄應音義』巻 4 の『觀佛三昧海經』巻 1）

「柧、古胡反、說文柧棱也、經文作觚、器名非義也」

「四柧、古胡反、說文柧棱也、經文作觚、器名也觚非義也。

おわりに

撰書以來、1400 年の歳月を閲した『玄應音義』は、各朝代に編まれた藏經等に含まれる多數の刊刻本等によって今日にまで傳えられている。しかしながら、この書が、寺院乃至民間などにおいて、どのように扱われ、如何様に流布されて來たかは、關連資料の少なさも因となって究明され難いままとなっていた。ところが、近年、敦煌・吐魯番出土の生の文書斷片の再確認等によってその様子を探ろうとする動きが起こり、その実態の詳考が進められ始めた〔注 20〕。舊來、『玄應音義』は、佛書等を閲讀するために用いられるものとして珍重されて來たのであるが、P.2901 等には、これを透脱する性格が見え隠れし、語辭、音韻を知るための字書の一種に変容させられつつあるさまが窺えるのである。原書所掲の文字、音義を節略、鈔寫して編書するのは、取捨された語句、音義に佛語を極端に節略する狀況が確認されるため、佛書、經論、閲讀研究のための工具書としての略本を創出しようとすることとは違ったこと、恐らくは、漢語の辭句を簡便に知るための字書を編もうとする目的があったからではあるまいか。『玄應音義』の研究には、その原書を追求することも、またこれを受けた後出の諸本の實態を探ることも重要なことであろう。P.2901 は、首尾を欠失した斷片とはいえ、從來の『玄應音義』の書式を大きく變貌させた形をもっており、このもの自体に『玄應音義』の流布の實態や衰亡のもとを窺わせる手がかりが藏されているように思われる。P.2901 は、佛典を讀むため、という當初の役割を離れて、漢語の屬文、修辭の用のために、そのもととなる語句、音韻を原書から節略、鈔錄して成ったものと推察される。この書は、唐代初期に至る折の、緇流の修學の動向の一端をあかすようにも思われる。

敦煌・吐魯番遺書中に、數多くの識字課本、音韻書、字書などが發見される實情は習學用字書の需要が生じてきた事實を消息することで佛典音義書が、佛語を減却する形で改訂、節略、鈔寫されることと大いに關わりをもつように思われる。

P.2901 は、僧徒、しかも相應の佛學を修めた沙門の手になったであろうことは、その卷次の編配を一顧しただけでも容易に推察できることである。そしてこの僧徒

は、例えば、紙背に記される演劇的場を設えて詩句應酬による眞理擧示を行うような文辭や詩偈の類を綴り得るものであったように筆者には想像される。P.2901 は『玄應音義』の逓傳の中から生み出された得難い資料であると言えよう。

〔注〕

1. 神田喜一郎編纂『敦煌秘籍留眞』2 冊（京都 小林寫眞製版所 1938 年 2 月、のち同氏「東洋學說林·敦煌祕籍留眞」『神田喜一郎全集』第 1 卷 同朋舍出版 1986 年 1 月に再收 459 頁）
2. 姜亮夫氏は「不知爲何經音義。起「聾聵」「衰耄」二詞、注中引用之書說文最多、此外有字體、崔寔四民月令、方言、廣雅、蒼頡篇、三蒼、史記、如淳說聲類等。當檢閱時、以倉卒未録全卷、僅將与字學有關者録存百數十條、茲并存而不癈云、民國三十年（1941 年）六月中旬、亮夫誌。」と述べている。（姜亮夫『瀛涯敦煌韻輯』1955 年 上海出版公司、のち同氏『瀛涯敦煌韻書卷子考釋』浙江古籍出版社 1990 年 10 月に再收 139 頁）

   また、こののち、周法高氏は「敦煌本玄應音義殘卷，見敦煌祕籍留眞新編，原卷藏巴黎國家圖書館，伯希和編目 2901 號。予曾取與今本對勘，知敦煌本所收條數遠少於今本，如今本第十七卷，敦煌本僅二十一條，蓋節鈔本也。但每條下音釋，則與今本異同不大，予另有跋論之。」と述べている。周氏は P.2901 について神田喜一郎氏の『敦煌祕籍留眞新編』からその情報を得たようである（『玄應反切字表　附玄應反切考』〔香港〕崇基書店 1968 年 12 月 198 頁）。なお、これにかかわる初出の論文は「玄應反切考」『中央研究院歷史語言研究所集刊』20 1948 年 第 359 ～ 444 頁）である。
3. 潘重規氏の論考は、姜亮夫氏所録の P.2901 の一部である 141 項の音義を引録したうえ、さらに、姜氏の釋文の一部を訂正しつつ、姜氏未録のものも加え、計 99 項を掲出したものである。同論の冒頭に「P.2901 摘録本新校」として「白楮。背爲殘佛經。首有女子與禪師問答詩卷、尾有標題一行：「孝經一卷并序」。姜氏云：本卷爲唐寫本、不知爲何經音義。重規案：所引無唐以後書。茲校正姜氏鈔誤、並略補與字學有關者如干條。」と記述している。（『瀛涯敦煌韻輯新編』（香港）新亞研究所 1972 年 11 月 560 ～ 571 頁）
4. 竺家寧氏は P.2901 の 280 條の音注資料のうちの 180 條を採取し、主に聲母の面から『廣韻』との比較を行い、P.2901 と『經典釋文』『玉篇』等との反切用字の異同を比較し「似乎可以推斷本卷實爲當時讀書人按當時語音唸書的音義詞典，很可能是一部放在手邊的參考工具書。」と述べている。（竺家寧「巴黎所藏 P.2901 敦煌卷子 反切研究」第十六屆全國聲韻學學術研討會論文 彰化師範大學 1998 年 3 月 のち、中華民國聲韻學學會 國立彰化師範大學國文系主編『聲韻論叢』第八輯 1999 年 5 月 227 ～ 244 頁に再掲）

   この竺氏の論考に對し、葉鍵得氏は、これを推奨すると同時に、竺氏の採録條を補正、さらに同氏未採録の 280 條中のその他の 100 條を補充、分析を行い、P.2901 の用途について「…應該是爲了方便閱讀某本佛經所做的字形、音義的卷子…」と述べている。（葉鍵得「巴黎所藏 P.2901 敦煌卷子反切問題再探」『臺北市立師範學院學報』第三十期 1999 年 3 月 241 ～ 252 頁參照）
5. 小林芳規氏は「P.2901、十九行　一切經音義よりの鈔出、卷次、經名不定、九世紀寫本」と記述。（同氏「一切經音義解題」古典研究會『古辭書音義集成』一切經音義（下）汲古書院 1981

年7月512頁参照)。この「十九行」の記述からすれば、同氏の睹閲したのは、全六葉の第一葉のみのようである。

上田正氏は「P.2901 前後殘欠し卷數も經名も記していないが、精査するに現存は卷一、三、四、五、七、十、十一、十二、十三、十四、十七、十八、十九、二十、二十一、二十四、二十五である。卷の順序は亂れており、卷内の語も飛び飛びの摘録であり、訓釋も節略したものが多く、凡そ三百三十余条」と論述。(同氏「玄應音義諸本論考」『東洋學報』第63卷 第1・2號 1981年12月参照)。

石塚晴通 池田証寿兩氏は「P.二九〇一 (八世紀中期寫、E形式)」と表記。(同氏「レニングラード本一切經音義 —Φ二三〇を中心として—」(『訓點語と訓點資料』第八十六輯 平成三年三月参照。)

なお、P.2901について言及したものには、徐時儀『玄應《衆經音義》研究』(中華書局 2005年3月 41～42頁)、于亭『玄應『一切經音義』研究』(中國社会科學出版社 2009年6月 89～91頁) などがある。但し、このP.2901に限ってのことであるが、徐・于兩氏は、張金泉氏の論考を引用するのみである。この徐、于兩氏の文には、張金泉氏の誤述部分ををそのまま援用したところが見られる。これについては注意が必要となろう。

6. 張金泉 許建平著『敦煌音義匯考』(杭州大學出版社 1996年12月 912～980頁)
7. 張涌泉主編『敦煌經部文獻合集』(第十册 小學類佛經音義之屬 (一) 張涌泉撰) (中華書局 2008年8月 4939～4998頁)。張涌泉氏は、P.2901を校勘するに當たり、「参校本」として『磧砂藏』本、『叢書集成初編』本を、さらに『金藏』廣勝寺本、『慧琳音義』所引本を参考として校勘を行っているが、一般的に善本とされる『高麗藏本』の使用を避けた眞意は不明である。
8. 張金泉「P.2901 佛經音義寫卷考」(『杭州大學學報』(哲學社会科學版) 1998年第1期)。しかし、この時は、神田喜一郎氏がこの寫本を『一切經音義』と指摘してから既に半世紀以上を經てしまった90年代半ば過ぎであった。このことは、P.2901の内容自體の究明にかかわる研究の遅れを如實に物語ることであった。
9. この「線、劒刎、庶隧、慷慨、一戩、籠罩」に關して、張金泉は「皆不見於傳本」「爲傳本所無」と述べたが、これに對し徐時儀氏 (「敦煌寫本《玄應音義》考補」『敦煌研究』2005年第1期) も指摘した通り、これらは現存諸本の差異によりあらわれた相である。すなわち、一部の傳本 (『磧砂藏』本や『叢書集成初編』本) にはその存在が見られないものの、『高麗藏』本、『金藏』(廣勝寺) 本、及び廣島大學所藏本には收録される実態があることである。
10. 李圭甲 明惠晶「敦煌寫本"伯2901"和初雕本高麗大藏經《玄應音義》的比較」(徐時儀ら編『佛經音義研究』 —第二届佛經音義研究國際學術研討會論文集 鳳凰出版社 2011年09月)
しかし、李、明氏の行論はきわめて雑然としており、依據の明示も見られず、原撰『玄應音義』の変容を把握するには不十分と見られる。例えば、兩氏の論中の「二. "伯2901"和"初雕本"中詞條有無的比較」と題した項で、掲出語の「淚渚、滋味、有翅」以外の、P.2901に見られ、初雕本に見られない、とした117の語詞が羅列されているが、これらの語詞が初雕本に見られない理由は、初雕本の「遺漏」ではなく、主として現在発見されている初雕本に、卷1、7、12、15、17、18の欠卷があるために引き起こされているだけの現実である。また、この117の語詞末に並べられた「胃脟」や「怵惕」の語は、それぞれ現在発見されている初雕本の卷三、卷五中の掲出語にその存在が確認されることである。李、明氏のこうした

彼此の比較は、P.2901 の本質の把握に対しては意味が薄いのではあるまいか。

11. このうちに、李圭甲、明惠晶兩氏は、初雕本及び P.2901 の書刻字の欠筆や避諱字を徵して、その刻成、書写年代を詳細に論考しているが、P.2901 を「則天以後才出現的」とする根據としている武則天の避諱字と見る助字及び反切上下字表記中の「即」「式」「得」は、「則」字の避諱字としては多種であり過ぎ、單に「則」字と同じ字母、韻母を示すために用いられただけに過ぎぬと推測できる面が強く、これをもって書写年代を決定付けることは困難であると見られることである。また、太宗李世民の名「民」字の避諱と見る「揞」(卷二十中の「抆之」の釋音字)、「罠」(卷十三中の胞罠の表記字) については、避諱の目的でこのように書かれたのか、通俗字体を表記しているのみなのか判別不可能で、しかも「揞」字が『高麗藏本』で「揞」とされていても、「揞」字は「抆」の音を示すものであるから、「揞」字に充てることは音韻上に問題があり、また、卷一中の掲出語「炒粳」の釋解下に「四民月令」と「民」字が欠畫をもたずに正書されていることを含めて見ると、これらに太宗の名に係わる避諱表現があるとは即斷できぬようである。なお、石塚晴通、池田證壽、張涌泉、小林芳規の諸氏の推論は〔注 5〕参照。

12. P.2901 の紙背の冒首部は、初行劈頭の文字の右部が消失しかけているが、「而」字の殘畫と見える。冒首部の残紙の余白の状態からこの前接部には文字は鈔寫されていなかったものと觀察される。鈔寫内容そのものは女子と禪師の詩の應酬による般若空觀の說示であり、鈔文中には禪師の名が記されていないものの、これと同種の數種の遺文、S.646、S.2672、S.3441 などを徵すると禪師の名が顗であったことがわかる。幸いに S.646 にその表題が「揚州顗禪師遊山遇石見一女人獨枕一床贈詩一首」記されるため、この禪師が揚州の顗禪師、すなわち天臺智顗禪師であることが知られる。ところで、S.2672 では、表題は留められていないが、「有一禪師、尋山入寂、遇至石穴、見一婦人、可年十二三、顏容甚媚麗、床臥翳席、宛若凡居、經書在床、筆硯俱有、目而恠之、以詩問曰」と詩の贈答の經緯が綴られている。鈔文はこの最末の「而恠」以下の部分であり、天臺智顗禪師に假託した話柄を通して空觀の解說をはかったもので一女子にやり込められる禪師のさまが記されている。のち女子の詩句中に「行路難」の題字を置き、「心中本无物、質爲无物、得心安无見、心中常見仏」(S.2672 では第 2 句目は「只爲无物」とある) の文を綴るところを見ると、この文が「見仏性」を說く禪者に由來するところもあるようにも思われるが、この文をもって一連の詩の問答の鈔錄が終り、次に同行のままに二文字の空格を置いて表題と見られる「无生法門」の文字を記し、その下に一文字を空けて「問仏滅度後」云々の『金剛三昧經』の「無相法品第三」から「總持品第八」までの文が 77 行に及び鈔書されている。この鈔文を『大正新脩大藏經』所收の經文「T09 №.273」と校覈すると、語句に節略と多少の改變があることがわかる。鈔寫者は主題を問答の鈔記の形に集約して問者と答者の名を省いた上、適宜語句を変容させている。ここでその特長の一、二を擧げれば、「視處所」「在無有處」「入清白處」「常在滅處」の「處」字を「受」と記し、法相唯識の述語を識達したかのように、身心にわたる感受、感覺を凝視する修禪者の実態を挙示するところがあり、また、「不住二乘、大菩薩道」を「如是觀空、乃名爲禪」等と記すところなどがある。結局のところ鈔寫される句文は禪の要諦を示すもので、このために經文の適所を鈔錄したものと言うことができるようである。

『金剛三昧經』そのものは、Robert,E.Buswell.jr により、唐初の法朗の僞撰說も出されて

いるが、唐代の經録にも「北涼失譯」として採錄されている上、沖本克己氏の記す通り（「朝鮮禪宗成立史への一視点 特に留学僧の動向を通して」『蔡印博士還曆記念論文集』1995 年 7 月 26 日）、必ずしも僞經と特定する必要がないようであり、P.2901 の紙背に鈔記される「无生行」「如來藏」「性不動」「心无心」「心即化生」「如來禪」「守一」「觀心」「性空智海」といった語句は、「如是觀空、乃名爲禪」の實質の個々を解くものと言え、これらの句文が同紙背の冒首部の詩話の内容と根底で脈絡し、しかも達摩の法脈をひき、唯識や華嚴思想ともかかわる「觀心（看心）」「心本不生」「守一不移」を主稱する東山法門の挙揚するものに近接するところが認められることである。

P.2901 の紙背の中心の『金剛三昧經』の摘録、鈔文は、その後末 3 行で經文に直接よらず「多心不生滅者」として總括されていて、そこには「心本不生、智實无滅也」との文が記されている。この一連の文は、「多心」「不生滅」「法生」「滅法」「心本不生」「智實无滅」といった術語によって措定されているが、概ね『金剛三昧經』の「無相法品第二」中の文言「其心生者、令滅滅性、……不生不滅」以下の解脱菩薩と佛の問答の箇所、内容を集約し、また、同經「入實際品第五」中の大力菩薩の「二入不生於心」に關しての問の中の「心本不生」の句を用いてこれを結んでいるが、この底流には、「謂此般若波羅蜜多無法可生、無法可滅」（『大般若波羅蜜多經』卷五百四十五）や、後の朝代に譯出された「復應觀自心、心本不生、自性成就」（『大方廣佛華嚴經入法界品頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』）といった内容、また如來藏、阿梨耶識を解く新羅僧元曉の口述になる「言依如來藏故有生滅心者、謂不生滅心、……故說生滅心依不生滅心、然不生滅心與生滅心、心體無二」（『大乘起信論別記』）等との文に通交するところがあり、この元曉の著中に「又若心隨緣變作生滅、亦可一心隨緣反作多心」と見え、「多心」の用語が徴し得るのである。なお、『大般若波羅蜜多經』卷四百七十一には「一切相智無生無滅」、同經卷五百五十六には「一切智實是無生」との句も確認できる。これらのことから『金剛三昧經』の經文の摘記の後末に鈔寫されたこの文の背景が、識を分析する法相唯識と般若眞空を見据えて、如來禪を主唱する禪流の修學に繋絡していることが知られることである。この一文は、鈔寫者獨自のものではなく、その師承の言說を摘錄したものである可能性もあるように思われる。

こうした文に續いて、同じ行中に二字の空格を置き、「臥禪師入切嚙鏃門」の題が書かれ、次行からこの具体的禪法が 19 行にわたり鈔記されている。そのはじめの 7 行は大字で、以下は改行後の小字での 3 行とさらに改行した後の小字での 9 行が續き、その末尾に「入西方仏国都無念無仏三昧寂定此是頓門莫輕」云々との文が記されている。これらは同一人の時を違えた鈔書の如く見られる。

ところで、臥輪禪師に關する遺文については、敦煌文書にも P.1494 に「臥輪禪師看心法」、S.5657「臥輪禪師偈」があり、また『六祖壇經』『禪源諸銓集都序』『宏智禪師廣錄』『萬松老人評唱天童覺和尚粘古請益錄』『宗鏡錄』『景德傳燈錄』等にもその偈句についての言及が見られる。この禪匠に早く注意を払った鈴木大拙氏は、「慧能よりもずっと以前に居たのではなかろうか」として、「神秀系に属していたもの」と見、また、その後に、柳田聖山氏は、S.6631 に「願わくは安楽国に生せんとあるによっても、少なくとも達磨系の禪者でなかったことは明らかであろう」と記し、淨土系の禪者と見なしていて、この二解が現在に引き繼がれているが、唐中期の圭峯周密が「因以彼修鍊功至證得即以之示人（求那、慧、稠、臥輪之類）」（『禪源諸銓集都序』卷 2）と記し、求那跋陀羅、慧光、僧稠と並べた

臥輪禪師は、宗派の枠が成立する以前の禪匠と見え、淨土系と評することは危險と思われる。この臥輪禪師は「臥輪有伎倆、能斷百思想、對境心不起、菩提日日長」との偈を詠じたという。この偈を修行僧から示された六祖慧能はこれに批判を加え、「慧能無伎倆、不斷百思想、對境心數起、菩提作麽長」(『六祖壇經』『宏智廣錄』『景德傳燈錄』) と駁したとされる。これらの内容は元代の萬松行秀老人が綴る「正如北宗、時時勤拂拭、莫使惹塵埃」(『萬松老人評唱天童覺和尚粘古請益錄』) の句が言い当てているようであるが、頓漸、南北を闡明しようとする『壇經』の撰者の神秀批判に通ずるものであり、臥輪禪師その人がこうした北宗、乃至これに歸趨させられた前代の禪流に屬する禪匠であったようにも推測されることである。こうして見るとこれら一連の習禪にかかわる句文の鈔寫を行った者は、達摩禪が擡頭し、禪流の諸匠が互いに對手を批判しつつ活躍する時代、則天武后の君臨する時代にさしかかる頃に道を學んでいたものと想像され、その書寫年代も早ければ七世紀末、遲くとも八世紀初と見て差し支えないように思われる。

なお、顗禪師と一女子との詩の贈答の文について、これを俗文學の一類として川崎ミチ子氏が採錄している (講座敦煌 8『敦煌仏典と禅』大東出版 1980 年 11 月 p323 ～ 325)。また臥輪禪師については、鈴木大拙氏 (『鈴木大拙全集』(増補・新版) 第二卷 岩波書店 2000 年 2 月 p441 ～ 442、452 ～ 453)、柳田聖山氏 (『初期禅宗史書の研究』柳田聖山集第六卷 法藏館 2000 年 1 月 p67 ～ 68)、田中良昭氏 (『敦煌禅宗文献の研究　第二』大東出版 2009 年 2 月 p368 ～ 382) 等がその遺文を採錄し小述もしている。

13. P.2901 に見られる『玄應音義』に對應する卷數については、張金泉氏らは『敦煌音義匯考』で二十四、二十五の二卷についての記述が欠けているが、その後、張氏は「P.2901 佛經音義寫卷考」(『杭州大學學報』(哲學社会科學版) 1998 年第 1 期) において、これを補入し訂正したと見られる。
14. 張金泉 許建平著『敦煌音義匯考』(杭州大學出版社 1996 年 12 月 913 頁)、張金泉「P.2901 佛經音義寫卷考」(『杭州大學學報』(哲學社会科學版) 1998 年第 1 期 100 頁)。
15. 當寫本を筆録した者が、この形を創出したか、或いは既にあったこうした形にした先人の編書を忠實に鈔寫したかは不明である。某の創出したこの形の原書を鈔寫したとすれば、某の意圖ということになる。
16. 『玄應音義』の卷八では、前半の『維摩詰所說經』から『兜沙經』までの 61 種經は「大乘經」で、後半の『優婆塞戒經』から『文殊淨律經』までの 10 種經は「大乘律」となっている。『玄應音義』の中でも極まれな構成である。
17. 〔注 10〕書 253 頁參照。
18. 神田喜一郎「緇流の二大小學家—智騫と玄應—」(『支那學』第七卷 第一號 昭和八年『神田喜一郎全集』第 1 卷「東洋學說林」同朋舍　昭和六十一年一月再收 192 ～ 194 頁)、及び張娜麗「字學大德玄應法師事跡小攷」(筑波大學 人文社会科學研究科『論叢 現代語・現代文化』第 7 號 2011 年 10 月) それぞれ參照。
19. 郭迻の事績については、高田時雄氏に「可洪隨函録と行瑫隨函音疏」(「中國語史の資料と方法」京都大學人文科學研究所 1994 年) 詳論がある。
20. 寺院の『一切經音義』「點勘錄」S.5895、P.4788、北臨 631、及び『一切經音義』「鈔經録」S.3538v が見られる。

52 墻—牆
策—乘策
53 力之—力之反
54 集—聚
羽葆—葆
55 俟—憑俟
56 紖—紖繫
置—於置
二同—二形同
57 剗—剗治
謂改—謂改更也
58 漉—漉諸
60 胡快反—胡快
61 飢—飢饉
隄—隄塘
痼—痼疾
62 說文—衍字
典刑—典刑伐
丁蘸—丁繭反
63 開閉—開閈
韃—濕韃
64 同—三形同
65 二同—二形同

67 旬—旬
鈎—鉤
69 葫—筋
便健輕捷—便捷輕健
70 矯—牾
饁糈餰—饁糈糈餰
71 彤然—彤然
72 洊—洊
74 知列—知列反
75 經作—經文作
80 負—圓
磲—櫨鏶
81 剖—剖治
82 砚砚—砥砥
83 苦得反—苦則反
旭—刓
經作—經文作
84 庑—疣
扰—枕
古者—古字
85 經作—經文作
87 歎鷞—嘆鷞
88 軥—鞫

89 絶緣—絶緣反
90 鯤—觬
木未判—未判
消—消
92 余支—余支反
93 訛—訛言
94 即—則
96 姦—蕣
97 蠱—蠱明
恿—恿戭二形
晻忽—晻忽
隮—晻隮
99 衢物—衢物反
101 經—經中
103 陵遲—陵遲
104 陷—陷此
105 窐—窒
106 擊—擊我
釪壙—釪瓘
107 徒見—徒見反
有足曰虫—有足謂之虫
109 斥—柘斥
110 巨月□—巨月反

111 帶鞢—帶鞢
鞋羅圖吒國—
韃羅圖吒國
112 跟—跟劈
㒳出—㒳出

【P．2901　校異】

〔凡例〕

・底本はP．2901、對校本として『高麗藏本』のみを使用した。
・校異は『高麗藏本』との文字の相違のみに限って掲出した。
・數字はP．2901の行數を示す。
・｜印の上部はP．2901、下部は校本の『高麗藏本』を記した。
・雅｜疋、辶｜辶等の相違は校異表記を略す。
・殘画部分は文字を□で圍み、欠字部分は□で示す。

4　□半｜僅半
5　侯遍｜矣遍
　　闖｜門闖
6　攖｜攦
　　即｜則
　　軛｜无軛
　　禦｜禦之
9　嘲｜嘲戲
　　燂｜燂身
10　嗽｜嗽於
11　仏仍｜佛仍
13　窠｜從窠
　　上或作｜なし
15　睹｜猪
　　拘｜拘
　　嘶｜嘶聲
16　愛財愛食｜
　　愛財曰貪愛食曰悋
17　孖｜孖慈
　　閏｜潤
18　適｜適生
　　凌｜淩
　　匳｜奩
19　苣｜茵
　　席｜重席
　　曹｜曹
20　痱癗小腫｜小腫
21　蜚｜蛸蜚
22　恢｜恢大
　　迴｜迴
　　甕｜甕
　　舞｜蹔
23　詭｜詭朋
24　膱｜畿
26　蓄積聚也｜蓄積也聚也
27　偶｜耦
　　訥｜不訥
28　箏蕚｜箏鬣
　　除田草器｜除田器也
29　誋｜誋
　　經｜經文
　　膺｜膺平
　　膺｜應
30　塗｜統塗
　　躓｜躓礙
32　檐｜檐邊
　　老安｜老安
33　蘓｜蘇
34　營營營三形同｜
　　營營營三形同
35　俟｜俟用
36　即｜則
　　踵｜踵相
　　種｜衝
　　柶｜四柶
37　義｜字義
　　經｜經文
38　虵｜虫
　　虹｜白虹
39　都蔦反｜口蔦反
　　儭｜儭身
　　同音｜字同
41　式才反｜則才反
42　芮昺｜昺芮
43　線｜擲線
　　今綫｜今作綫
　　鞮鞮｜鞮鞮
44　古葬反｜口葬反
　　琖醆｜琖醆
　　魚｜魚
45　焰｜焰
46　韶｜音韶
47　揎袖出臂｜揎衣袒出臂
49　坂｜阪
　　附｜峭
50　扆｜扆招
51　不□｜不純
　　□□｜作屣

圖版六　P.2901　その6

94 具謂之櫪撕字林押其指也　臠 力轉反肉臠也 ミ 經文作腿ミ非　步搖 釋名云上有垂珠步即搖動經文作瑤非也　餬口 又作餬同方言

95 寄食也　銀鐺 力當都唐反說文銀鐺鎖也經文作狼非　鳴嘸 古文嘸同子六子合二反聲類嘸亦鳴也　諄邢 古文註同

96 之閏反　曰趍 正體作麸古文作麵　草姦 又作菅蘭二形同也　遍徇 又作徇同絳遵反徇循也亦巡行也行走宣令曰徇說文行示曰

97 徇字從彳　魚 又作鮮同思錢反廣疋鮮好也亦善也　名戚 古文慼今作勇同　晻忽 古文隋今暗同於感反說文晻不明　苦槀 古文

98 囝同撻各反蒼頡篇云囊之無底者也　不嫫 莫奴反醜者也即摹母是　連摷 呼結反廣疋摷束也埤蒼圈係也言急束也說文作覲

99 誥幼文作乾皆一也　屈无 衢物說文屈无尾也屈短也　腆美 古文作嶜同他典反方言腆重也東齊之間謂之腆廣疋腆至也腆厚也善也

100 傅飾 方務反傅猶塗附也傅藥傅粉皆是　餼施 古文槩同虛氣反以牲曰餼ミ猶稟給也埤蒼餼餽也字書餼餉也　俱譚

101 或作具譚經多云瞿曇皆是梵言輕重也　靷靰 五更反下胡浪反成壞身中風名　開披 正字作皷同普彼反蒙文云皷折也披猶分

102 也經文作擺補買反手擊也擺非此義　擗口 補格反廣疋擗分也謂手擗開也經文作拍非也　飤此 囚恣反說文飤糧也謂以食供設人曰飤

103 經文作餡借音耳　羅轒 扶分反字比丘羅轒經文從賁作轒非也　陵遲 古文作劾夌同力蒸反　米潘 敷袁反蒼頡篇

104 甘汁也說文潘淅米汁也江北名泔江南名潘經文作糒非也　陷 古文銘同　不惜 暴文云意足曰惜是也　物傷

105 又作澌同悉漬反物空盡曰傷也　喟然 又作嘳說文大息歎聲　罄竭 古文窒同可定反說文罄中空也尔正磬盡也經文磬樂器名

106 捃拾 又作據同居運反方言捃取也　闐ミ 又作嗔同徒堅反　掔 苦田反与牽同引也挽也　釬瓆 案字義宜作下竇

107 音徒見今作于闐國名　涕泗 自鼻出曰泗自目曰涕　虫豸 直尔反尔正有足曰虫无足曰豸　鞠頰 渠六反案鞠謂聚餟也字宜作趨通

108 俗文體不申謂之趨　麦鬻 又作糋今作粥同之六反說文粥糜　噭嚾 又作嘂譟二同古弔反下又作喚大呼爲嚾噭呼也　梟磔

109 不孝鳥也冬至日捕梟磔之經文作掉誤也磔音竹格反　開拓 古文版今作拆同他各反拓亦開也　胞罠 補交反下武貧反大臣名也經文作怋非也

110 鞬櫼 宜作揵建言反文字集云揵搏蒲采名下巨月反　阿遫 籀文作趣古文作遫今作速並同　弭伏 又作弥同亡尔反弭止也亦安也

111 帶鞢 又作鞢同火骸者　鞋羅 剛吒國 他口反剛烏溝反　辟訣 古六反死別曰訣

112 吟哦 又作訡牛金反下吾哥反江南謂諷詠爲吟哦　草秸 □□□□□ 跟劈 □□□□ 哘出 □□ 古文

（後欠）

圖版五　P.2901　その5

75 二形同居美反廣雅軌跡也說文車轍 財賄 古文賄同呼罪反 𧶠矛 古文鏃今作𥿄同蘆亂反小也矛或作鉾同莫侯反經作

76 鋑樣二形又作牟 鴳鳥 又作鵝鶬同烏諫反 堙羅 古文堙𡍮二形今作堙同於仁反帝釋爲王名經中或名堙邏婆邏或言伊羅鉢多羅

77 此譯云脊葉身長九由旬高三由旬其形相稱也堙鳥賢反 碭手 古文碭䟽今作狛又作舐同食尔反以舌取食經末作哦䟽末見所出 稠穊 古文

78 穊同居質反說文稠多也穊亦稠也 晏然 經文從門師子鳴弓虎九聲作闕非也 尰呴 又作嘯同呼交反 侹直 古文頸同勑頂反通俗文

79 平直曰侹經文作蹎作蜓非也 頻伽 毗人反經文作蹎嗅檢無所出 剬割 聲類剬同之兖反說文剬斷首也亦截 祭餟 古文掇聲類作

80 餟同猪芮反說文餟爵也音力外反字林以酒浚地祭也方言餟饋也 拳搋 又作捲同渠員反下又作拔同勑佳反猶手挃也 磔 莫朗反說

81 文磔柱下石即柱礎經文作錄誤也 兩輆 又作輾同子孔反 刳 古文斫銘同力各反去節曰刳經文作落非 地肥 劫初地脂也經文作膍非體

82 摽牓 摽從片經文從木作榜非也 靦靦 又作靦同力類反瓦破聲曰靦說文蹈瓦聲躐躐也經文作覽躐誤也 茶帝 徒加反經文或作嗟嚼

83 二形非體 五刻 古文剮同苦得反刻削也經文作剮非 盪鉢 古文蕩又作蕩同盪滌洒器 一函 胡緘反經作𠂤音陷坑也非此義 顫頑 古文

84 臆又作臆同之繕反下古文鈗疫頑三形今作庑同尤畐反四支寒經作扰非 溺者 字體作屁說文小便也經文作溺古者多假借耳 欑箭 古文儹同徂丸反

85 聚也從木 金扉 音非經文作闕誤 如甛 又作餂同說文甛美也經作酟非 搆牛 古候反謂搆捋取乳經文作犄古觸字誤 氣劣

86 古文吃炁二形同 誦習 經文作謏丑俠反言不止也非此義 慕脩 古文縵同子夘反經文作繾繼也 綺語 ミ不正也經文作誂非體

87 并餐 人名也相承音飽未詳所出案古文餗饌二形今作飽ミ猶滿也此應餐字誤作也餐音於焰反嘆咤 古文歎嘆二形同他旦反 咤 又作

88 唾同竹嫁反通俗文痛惜曰咤也 轟ミ 今作軥字書作軥同呼萌反說文羣車聲 企望 古文跂𧻚二同舉踉曰跂

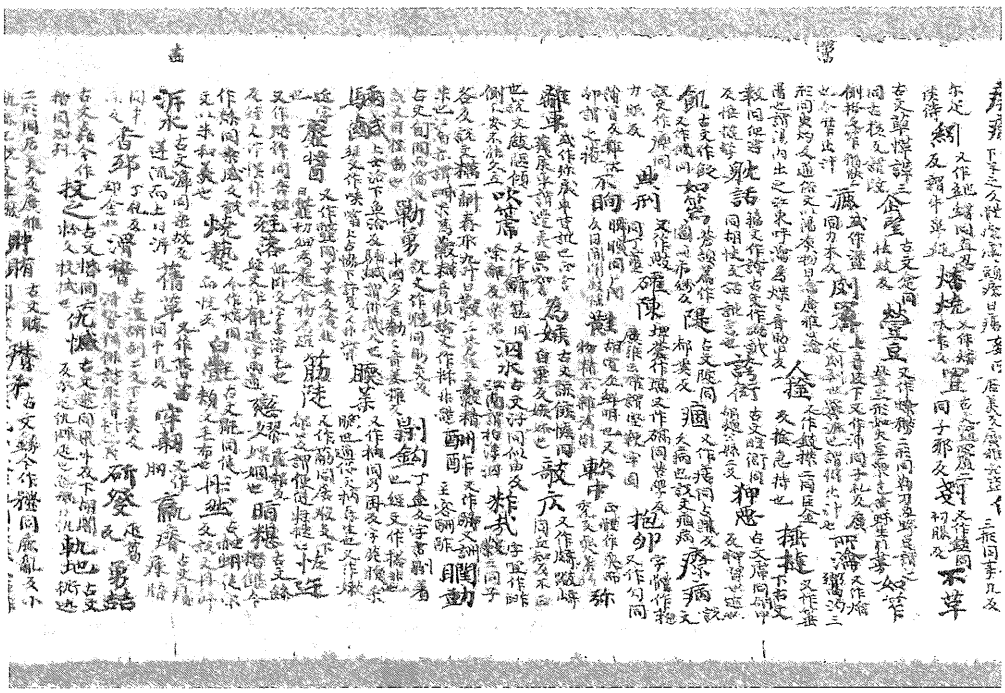
89 徒對反言羣隊相隨逐 凍瘃 古文瘃同寒瘡也 穴泉 古文泟同絶緣水自出爲泉經中作㵎或作淚非體 敝食 口咸反謂敝啄

90 而食也經文有作貪或誤作竈皆非 槶煑 古文鯉同胡昆反通俗文合心曰槶纂文云木未判爲槶經中作渾濁之渾非此義 湒ミ 又作湒同

91 思入史及二反 毗紐 女九反經文作伹非也 畐塞 普逼反畐滿也經文作逼誤也 襤褸 經文作藍褸非體也 銅魁

92 苦迴反說文藥斗也經文作鐳攔二形非體 老瞎 又作暍同文字書一目合也 椸架 古文楎椸今作箷同余支礼記男女不同椸架鄭玄曰

93 竿謂之椸可架衣 不啻 丁計反嚏鼻也經文作咖非也 訛 古文鳶譌吪三形同五戈反 櫬櫬 力的反下葵奚反通俗文考囚



圖版四　P.2901　その4

56 尓定 俟待 紖 又作絆繩同直忍反謂牛鼻繩 燔燒 又作繙扶袁反 罝 古文組置二同子邪反 剗 又作鏟同初眼反 不草

57 古文卑憚澤三同古核反謂改 企望 古文企同袪豉反 鎣豆 又作蹊樗二形同勒刀反野豆謂之鎣豆形如大豆而小色黃野生引蔓 如笮

58 側格反笮猶槩也今笮出汁 漉 或作盜同力木反 刻齌 上音皮下又作泲同子礼反廣疋刻剥也齌漉也謂搦出汁也 所瀹 又作爚鬻沟三

59 形同臾灼反通俗文以湯煑物曰瀹廣雅曰瀹湯也謂湯内出之江東呼瀹爲煠〻音助甲反 人捻 又作鈸撰二同巨金反捻急持也 捶撻 又作箠下古文

60 鞑同他達反撻擊 躭話 籀文作譫古文作舔誠同胡快反話訛言也 誇衒 古文眩衒同胡麵公縣二反 狎惡 古文庸同胡甲反狎習也近也

61 飢 古文作飠又作饑同 如笻 蒼頡篇作圜同市緣反 隄 古文隄同都奚反 痼 又作痞同古護反久病也說文痼病 療病 說文作

62 說文作藥同力照反 典刑 又作鼓同丁蠻 礭陳 埤蒼作墻又作碻同苦學反廣雅云礭謂堅鞭牢固 抱夘 字體作苞又作勺同

63 蒲冒反雞伏卵謂之苞 不眴 瞬瞚同尸閏反目開閉數搖 鼲 胡寡反鮮明也又物精不雜爲鼲 軟中 正體作耎而兖反耎柔弱 弥

64 離車 或作弥戾車皆訛也正言蔑戾車謂邊夷無所知者 爲嫉 古文諛嫉嫉同自栗反嫉妬也 敧亢 又作蹻同丘知反不正

65 也說文觭隥傾側不安不能久立 吹箎 又作鼸笹同除離反樂器 泅水 古文浮同似由反江南謂拍浮泅 粹哉 字宜作昨毅二同子

66 各反說文糲一斛舂取九斗曰毅三蒼注云毅精米也江南亦謂師米爲毅糲音賴論文作粹非體 酬酢 又作醻又詶主客酬酢 瞤動

67 古文旬同而倫反說文目搖動也 勦勇 說文作巓同助交反中國多言勦〻音姜權反 翦鈎 丁盍反字書翦著也經文作搭非也

68 騙鬳 上七洽反騙鬳謂俳戲人也經文作啖嚼上古協下許及反非此用 腴菜 又作衲同乃困反字苑腴柔脆也通俗文衲再生也又作嫩

69 近字也 壟醬 又作壟同子奚反淹韭曰壟切細爲齏全物爲葅 筋陡 又作蒟同居殿反下都口反謂便健輕捷也 恠迕

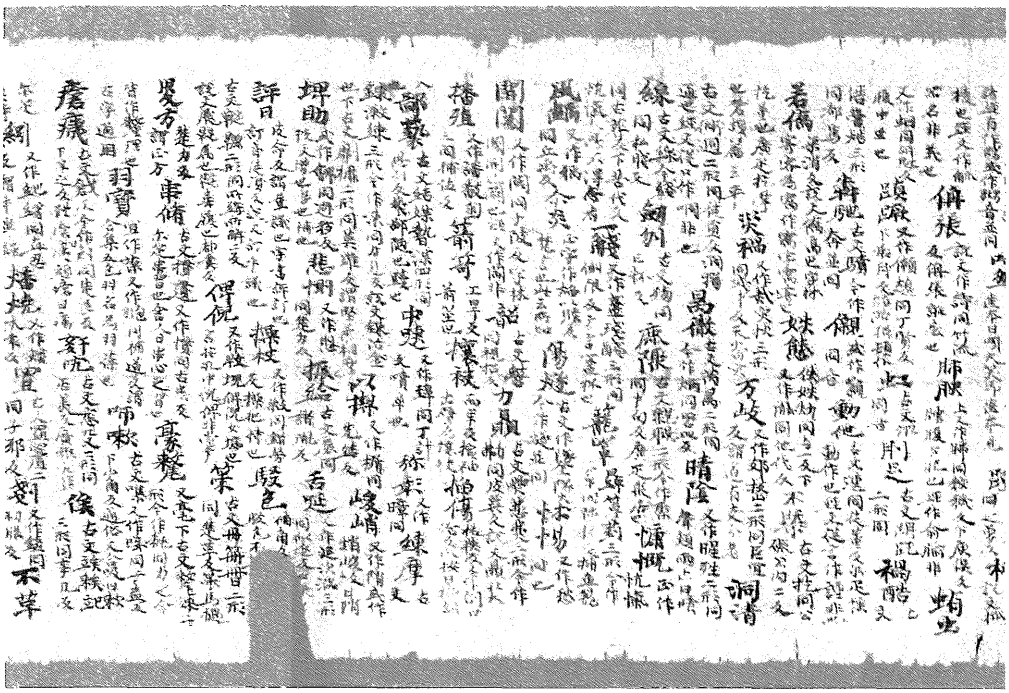
70 又作矧作吾故反經文作悞非也 絕落 他臥反字書落毛也經文作絕近字兩通 戀嫪 盧報反嫪嫋也 脂糂 古文餘糂今

71 作糝同桒感反說文以米和煑也 燒蓺 今作炳同悅反 白氈 古文毳同徒而反說文丹飾 彤然 古融蚓徒宗反說文丹飾

72 汗水 古文漣同桒故反逆流而上曰汗 蒨草 又作蒨茜同千見反 牢韌 朋又作韌 羸瘠 古文蔬瘠

73 同才亦反 香邱 丁礼反邱舍也 滑稽 古沒胡刮二反下古奚反滑稽猶俳諧取滑利之義 斫癸 疋葛反 勇喆

74 古文嘉今作哲同知列 抆之 古文撟同亡粉反抆拭也 仇憾 古文逑同渠牛反下胡闇反尓疋仇讎疋也怨耦曰仇 軌地 古文衛迅



圖版三　P.2901　その3

37 棱也經文作觚 罍名非義也 倜張 說文作譸同竹流反倜張誑惑也 肺腴 上又作脯同敗穢反下腴俱反腴腹下肥也經作俞腧非 蝟虫

38 又作蝟同胡魏反 腹中虫也 蹟蹶 又作顛越同丁賢反蹶居月反蹟蹶猶頓仆 虹 古文虹同音 刖足 古文朔跀二形同 禍酷 古文

39 偕嘗焰三形同都萬反 犇馳 古文驥今作奔並同 儭 或作襯同音 動他 古文通同徒董反尔疋搖動作也經文從言作譠非也

40 若儁 渠消反說文儁高也字林寄答爲譸作譸字譸寄也 姺態 佚姺劫同与一反下又作傞同他代反 不槩 古文柉同公礙公內二反

41 柉量也廣疋柉摩也蒼頡篇云平 災禍 又作烖灾扶三形同式才反天火曰灾 万岐 又作郊愆二形同巨宜反謂道有支分者 洞清

42 古文衞迴二形同徒貢反洞猶通也經文從口作啁非也 昺徹 古文茜昺二形同今作炳同碧皿反 晴陰 又作曀殣二形同聲類雨止曰晴

43 線 古文線今纔同私賤反 劒刎 古文殉同亡粉反 庶隮 古文鞮聽二形今作聚同才句反廣疋聚居也 慷慨 正作忼慨

44 同古葬反下苦代反忼慨大息不得志者 一戔 又作盞琖醆三形同側限反方言盞杯也 籠罩 羅章箭三形今作罩同陟挍反捕魚籠

45 風齲 又作犡同丘禹反 尒炎 正字作焰以贍反梵言也此云所知 陽燧 古文作鑒璲今作燧并同 怵惕 又作愁同也

46 開闖 又作闕同于陂反字林闖開也闢也經文作闢非 韶 古文韶同視招反 力贔 古文奭忠奚三形今作勑同皮冀反說文贔壯大

47 播殖 又作譒敏亟三形同補佐反 箭笴 工旱反箭莖也 攘袂 而羊反擅袖出臂爲攘袂 掐傷 枯狹反又作剞口洽反爪按曰掐剞

48 入也 鄙褻 古文結媟袞渫四形同思列反褻鄙陋也黷也 中喫 又作鏘同丁計反嘖鼻也 弥彰 又作暲同 練摩 古文

49 錬澈練三形今作湅同力見反說文錬冶金也下古文劙擲二形同莫羅反謂堅柔相摩 以楔 又作楔同先结反 峻峭 又作陗或作峭峻坂曰陗

50 埤助 或作俾同避移反說文增也厚也補也 悲側 又作愧同楚力反 振給 古文賑同諸胤反 舌唌 又作涎次溫三形同似延反口液也

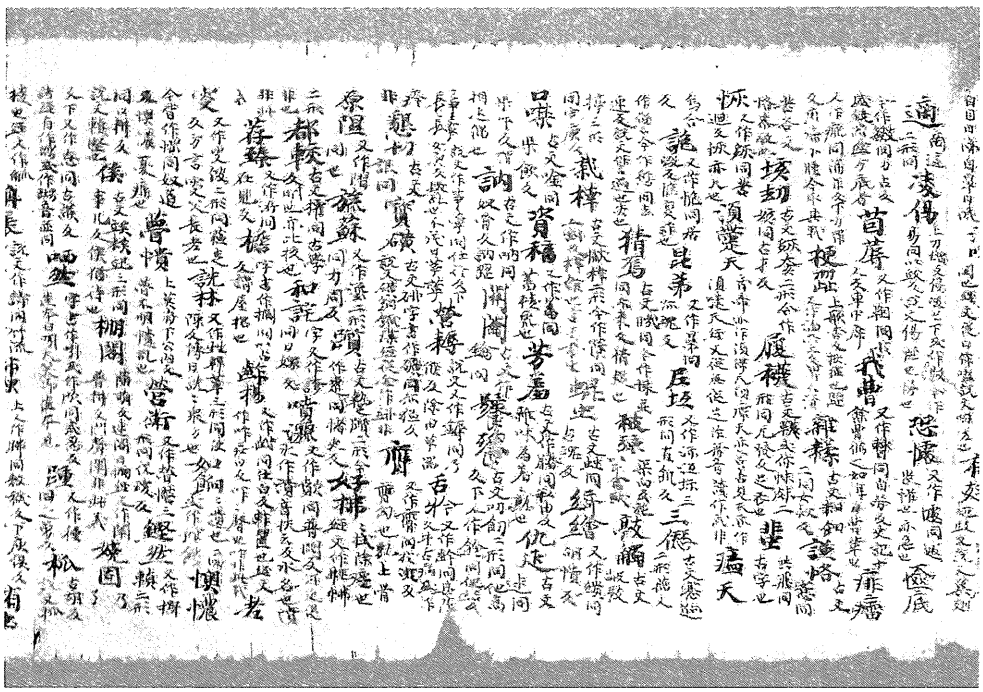
51 評曰 皮命反謂量議也字書評訂也訂音徒頂反說文訂平議也 操杖 又作敲同錯勞反操把持也 駁色 補角反□駁色不□ □□

52 古文鞭韆二形同所綺所觧二反說文屣韆屬也韆韋履也都奚反 俾倪 又作睥睨俾倪女牆也言於孔中倪俾非常事 策 古文册箭冊三形同楚革反策馬撾

53 叟方 楚力反謂正方 串脩 古文摟遣又作慣同古患反尔疋串習也舍人曰串心之習也 豪氂 又毫下古文氂緐二形今作牦同力之今

54 皆作氂理也 羽賓 宜作葆又作毓同補道反謂合集五色羽名爲羽葆也 吊嗽 古文噭同子盍反下山角反通俗文合吸曰欻

55 瘡痍 古文餓仄今作創同楚良反古字通用 奸宄 古文窓姦二形同居美反廣雅宄盜 俟 古文竢耀䟦三形同事几反下羊之反體瘡曰痍頭瘡曰瘍



圖版二　P.2901　その2

18 適 商遠 二形同　凌傷 上力繒反侵凌也下或作敭今作易同以豉反說文傷輕也慢也　恐懅 又作邁同遽 畏懼也亦急也　匳底 盛鏡器匳方底者

19 苟蓐 又作鞠同於人反車中席　我曹 又作轡同自勞反史記十餘曹循之如淳曰曹輩也　痱瘤 反痱瘤小腫今取其義

20 梗刖 上歌杏反梗強也蹙 又作剛同蒲罪反下力罪 又作瀋所立反謂不滑　雜糅 古文粗餔 二同女救反　謙恪 古文愆同 恪苦各反恪恭敬也

21 垓刼 古文絯奚二形今作 垓同古才反　履襪 古文韈或作帓韈二形同无發反足衣也　蜚 共飛同 古字也

22 恢 又作絯同苦 迴反恢亦大也　須蹔天 音帝亦作須滯天須癠天亦言善見天亦作須嚏天經文從無從足作舞音讀作武非　瘟天

23 鳥合 反　詭 又作恍同居 毀反恍變詐也　昆弟 又作昆同 孤魂反　尼坵 又作泥洹坵三 形同直飢反　三僽 古文塞遍 二形籀文

24 作譽今作愆同去 連反說文譽過也失也　猜焉 古文臧同今作怯並 同鹿來反猜疑也　被弶 渠向反施 以取禽獸　敦觸 古文 毆敦

25 搏三形 同宅庚反　栽梓 古文𣏟梓二形今作𣏟同 五割反梓餘也言木栽生　蜫虫 古文蝨同 古魂反　綺繪 又作繢同 胡憒反

26 口噤 古文喰同 渠飲反　資稽 又作薔同 薔橫聚也　芳羞 古文作臻同私由反 雜味為羞之孰也　仇迈 古文 逑同

27 渠牛反謂 相疋偶也　訥 古文作吶同 奴骨反訥蹉　關闠 古文作 鑰同　饕餮 古文明朗二形同他高 反下又作餮同他結反

28 髣髴 說文作髣髴同仕行反下 女庚反髣髴乱也不茂曰髣髴　營耨 說文又作鎒同乃 候反除田草器　舌忴 又作齣同其蔭 反牛舌病或作

29 袴 非　懇切 古文 祿同　寶磺 古文卼字書作礦同孤猛反 說文礦銅鐵璞經從金作鉾非　膺 又作膺同於凝反 膺匈也乳上骨

30 原隰 又作鄈 同也　旒蘇 又作遝二形 同力周反　蹟 古文蹩躓二形今 作蹇同猪吏反　好拂 ミ扶除塵也 經文作髴拂

31 二形 非也　都較 古文權同古學 反明也亦比校也　和詫 字又作誇 同丑嫁反　噴灑 又作歕同普悶反經文從

32 非此 義　荐臻 又作洊同 在見反　檐 字書作欄同以占 反謂屋梠也　齻楊 又作齻同仕白反齻齼也經文 作咋莊白反咋ミ聲也咋非此義　老

33 安 又作叟傻二形同蘊走 反方言安父長老也　詵林 又作甡辪莘三形同使 陳反傅曰詵ミ衆多也　如餉 ミ遣也餉 或作饟饋　懊懥

34 今皆作慆同奴道 反懊懥憂痛也　曹憒 上莫崩下公內反 曹不明憒乱也　營衛 又作營憕三 形同役瓊反　鏗然 又作搗 輹二形

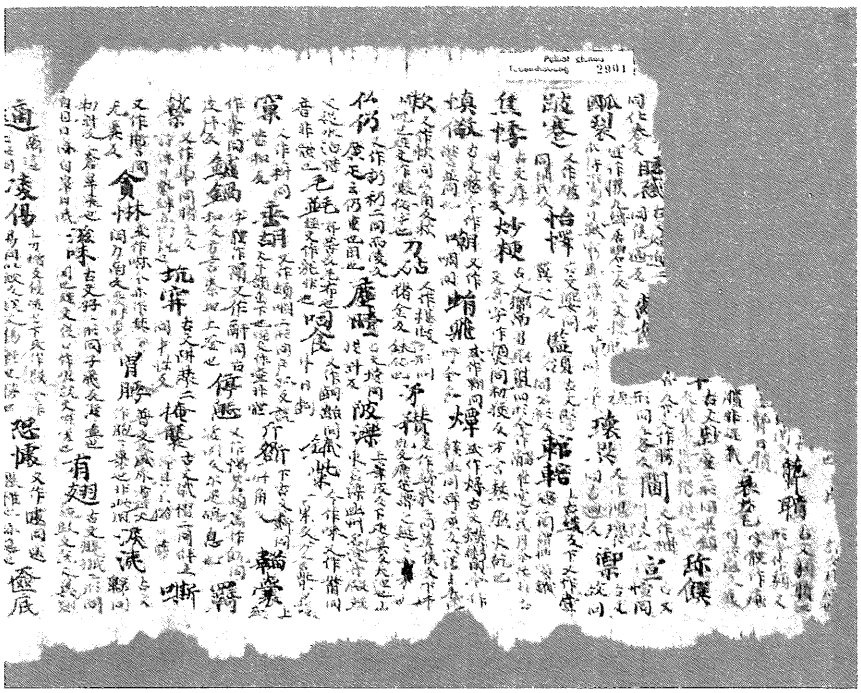
35 同口耕反 說文輹堅也　俟 古文竢俟俟二形同 乎凡反俟猶待也　棚閣 蒲萌反連閣曰棚經文作閣 普耕反門聲閣非此義　嬈固 乃了

36 反下又作惡同古護反 諸經有作朋或作朋音並同　哂然 字書作咍或作吹同式忍反 齒本曰咍大笑即齒本見　踵 又作種 同之勇反　枧 古胡反 說文枧

【P.2901 圖版・釋文】

〔凡例〕

・釋文は寫本の原字通りに表記することとしたが、一部通行字體も用いた。
・文字の斷欠部分は　⌊　⌈、〔　〕、殘画部分は　⌋　で表記した。
・衍字と判断されるものもそのまま録文した。
・欄外冠部に補訂のため加えられた小字は本文釋文に反映させる形で採録した。
・〰〰印は校異のある箇所を示す。



圖版一　P.2901　その１（フランス國立圖書館藏　拠「IDP データベース」）

（前欠）

1　⌊也　翳□　□□□□　計反目病也

2　⌊子　鼉鼉　鼉聵　古文顙聵二形今作顙又

3　⌊生聾曰聵　聵非經義　袞耄　字體作褒同所龜反褒

4　⌊半　古文鈔廉二形同渠鎮反僅劣也僅猶纔也　玝饌

5　⌊□□□　同仕眷反　眩惑　古文媚迥二□同侯遍反　斷斷　⌊　⌋斤反下又作腂⌊　⌋形同五各反　闊　又作梱門限也　宣　古文愃同

6　甌裂　宜作攫九縛居碧二反說文攫爪持淮南子曰獸窮即攫是也　軛　⌊　⌋枙同於革反　瓌異　又作傀瓌同古迴反　禦　古文釣同

7　跛蹇　又作趿同補我反　怡懌　古文嬰同翼之反　監領　古文監同公衫反　轄轄上　古緩反下又作鞏鏈二同謂軸頭鐵

8　焦悸　古文瘵同其季反　炒粳　古文鬻韭煎翌四形今作醮崔寔四民月令作炒古文奇字作獲同初狡反方言熬煎火乾也

9　慎儆　古文愛今作警並同也　嘲　又作嘲同　蜎飛　或作翾同　燂　或作燖古文燅鬻同今作鞍並同詳廉反以湯去毛也

10　嗽　又作欶同山角反欶吮也經文作嗽俗字也　刀砧　又作椹斟二形同猪金反鈇砧也　矛攢　又作鉾戟二同莫侯反下千乱反廣疋謂之鋋ミ小矛也

11　仏仍　又作訥枌二同而陵反廣疋云仍重也曰也　塵曀　古文壇同於計反　陂濼　上篳皮反下辺莫反大池也山東名濼幽州名淀音殿經

12　文從水泊借音非體也　毛毳　布莽反毛布也經文作氈非也　呵食　又作嗣齮同牛曰齮　鐵柴　今作哧又作觜同子累反方言柴鳥喙

13　窠　又作菓同苦和反　垂胡　又作頷嗝二形同戶孤反說文牛頷垂下也經文作蜚非體　斤斲　下古文斷同　韜囊　上或

14　作囊同皮拜反　鑪鍋　字體作鬲又作鬴同古和反方言秦地土釜也　停慝　又作愒蒼頡篇作氓同塊例反尔疋憩息也　鬻

15　縶　又作馽同睹立反詩傳曰縶絆亦拘執也　坑穽　古文阱棻二同才性反　掩襲　古文戩褶二同辭立掩其不備曰襲　嘶

16　又作暫同先奚反　貪惏　或作啉今亦作婪同力南反愛財愛食　胃脬　普交反盛尿者經文作胞ミ裹也非此用　淚洟　古文

17　勑計反三蒼鼻液也自目曰淚自鼻曰洟　滋味　古文孖二形同子夷反滋益也閩也經文從口作嗞說文嗞嗟也　有翅　古文翨翅二形同施豉反說文翅翼

【 P.2901　圖版・釋文・校異 】